

みち しるべ
人生の道標

出 会 い

江原重雄



出 会 い

人生の道標 じんせい みちしるべ

私が大学に入学してから、ちょうど二十年が経ちました。その二十年間の体験を本に残して置きたいと何年前から思い立ってはおりましたが、一年ほど前に「人生の道標」という言葉が頭のなかに閃き、その言葉をテーマに使って本にしようと思いい立ってから、一年がアッというまに過ぎてしまいました。

私には現在中学校二年、小学校六年の二人の娘と、小学校五年の息子がおり、その三人の子供達に父親の考え方、物の見方、生き方を文字を使って、文章によって、大人になって行く過程で悩み事や困ったとき、そして何かに疑問を持った時に読み、自分達の人生の道標に役に立てばと綴り始めた次第です。

私は大学の文学部を出たわけでもなく、取りわけて文章を書くのが得意なほうではありません。小学校、中学校、高校といわゆる国語という教科は苦手な教科でした。小学校何年頃かさだかではありませんが、絵が好きでよく一人で描いておりました（私は一人っ子です）。そんなわけで高校時代は美術部に席を置き大学では芸術学部に入學したのです。ここでは私の生立ちについては後で書く機会もあるでしょうから本題に入って行きましょう。

人間はとっても寂しがりやです。もしも、地球上に貴方が一人取り残されてしまったら生きて行けるでしょうか？

動くものすべてが消えてしまつて、植物だけの世界に一人になつてしまつたら生きて行けるでしょうか？
人が一人から二人になり家庭が生まれ、村や町や市や都市となり国家をなす時、自分の存在あるいは、一人ひとりの人間の存在が希薄きはくになつて行き、いつのまにやら自分の思つていた道を歩まず、いつ、誰が、決めたのか分からない様な迷路を歩み始めているのです。

最近の親達は子供達に人生のレールを敷いてその上を歩かせたがるとよく耳にすることですが、親達にとつても実際にはそのレールの明確な形など捕えようもなく、ただ漠然ぼくせんとレールを敷くことだけに専念しているのが現実ではないでしょうか。それは当然のこと人間は未来を予知する能力はないからです。

人の一生は色々な道にたとえられますが、一人ひとりの道が最も適した道か探すこと自体大変な事柄かも知れません。一生捜せずじまいで終わる人も大勢いるのです。

私がこれから書き綴る人生の道標はどの項目（テーマ）でも、その項目の答えは述べておりません。現在の本屋さんに行けばありとあらゆる本が出版されており、その筋の専門書というのが数多く出版されており、そしてまた専門書なる物はどうしても技術書になりがちです。考え方や、感情を述べるより技術書にしたほうが色々なメリットがあるのでしよう。しかし私が過去どんな技術書を読んでみてもその通りに行つた例がありません。

人間の言葉も一種の技術です。ですから人の言つた通りにおこなつてもうまく行く事は無いのです。人間の感性は、百％文字や言葉で表すことは不可能な事なのです。一人ひとりが言葉と出会い、文字と出会い、

芸術と出会い、音楽と出会い、大自然に出会い、人間と出会う、生きて行く体験のなかから言葉や文字が生まれ本になって行くからです。

これから書き始める事柄は、あくまで道標です。道標とは、そう、今風に言えば道路標識とでも言った方がわかりやすいかも知れませんか。道路標識で度々疑問に感じることがあります。車を運転なさる方なら、おわかりになると思いますが「何処^{どこ}何処方面まで何キロ」、矢印で「右は何処何処方面、左は何々方面」とあり、おかしいな、あの標識どうりに行くと大変遠回りになる。また初めての道で道路標識どうりに行ったら道がわからなくなってしまうた、などという経験をお持ちの方も少なくないでしょう。

道標という物は大変、無責任なものです。案内人のように最後まで責任を持って案内してはくれません。また道路標識にそこまで望むこと自体、無理な事、不可能な事なのではないでしょうか。

人生の道標とは、人生の答えとは違います。私の書き綴る道標とはお読みになる一人ひとりによって答えを見付けて行くための道標であって、案内人ではありません。人々を導くことなど出来るはずありません。どんな有名な本を読み、偉大な人に話を聞き、この本を読んで共鳴^{きやうめい}できても、現実なんら変わらず、道標の第一歩を歩み始めないかぎり現実の有様は変わりません。道標の前であれこれ考え悩んでみても、答えはおろか本来の進むべき道すら見失ってしまいます。人が生まれ落ちたときから、その人の道標は存在し始めているのですが、ただ悲しいかな見えないだけなのです。

これから書き始める各項目、テーマは、どれを一つ取っても一冊の本では表現できないほどのテーマばかり

りです。あくまでも、一つの方向を示す道標として述べて行きます。
道に迷わないように、もしも迷ってしまったら色々な人に聞くなり地図をもう一度見直すなどして進んで
ください。



昭和六十二年十一月

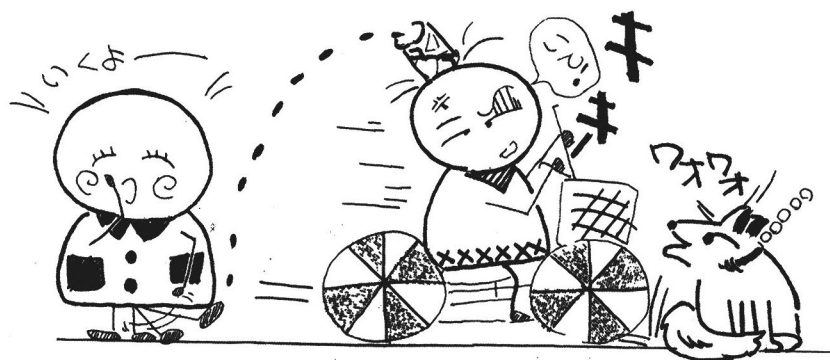
目次

一、人生の道標（始めに）	1
二、物の見方	11
三、生まれてくる	14
文明と文化	19
四、人間とは何か	20
愛と恋の違いについて	39
五、学問とは何か	45
テストって何故するの？	50
成績表とは何か、通知表とは	53
今日社会問題になっている教育戦争とは	69
六、生涯教育について	75
七、ちょっとひと休み	



八、日本から天才は生まれない……………	79
九、理想と現実のくいちがい……………	93
十、お金と言葉と人種差別……………	101
お金とは何なのか、何であつたのか、そして今は何なのか……………	102
言葉とは……………	108
人種差別（人間差別）……………	114
十一、性について考えてみよう……………	121
十二、最後の道標……………	129
終わりにあたって一言……………	134

表紙デザイン	江原重雄
挿絵	江原映子
アニメイラスト	江原由香



物の見方



まず始めに物の見方を述べてみましょう。ここでは物の見方の技術論を書くようにしているではありません。
ん。

例えば最近の本の中には数々の血液型で性格が違ふといった本が売られておりますが、確かにその傾向はあるでしょう。性格が違えばおのずと物の見方も変わってくるでしょうし、行動も変わってくるでしょう。しかしその様に一言で片付けてしまったら、道標の前に立ち止まって、初めから進むことを否定してしまつた事と同じになってしまいます。とにかく何事においても悲観的な見方でなしに、第一歩から歩み始めましょう。

この項で述べておきたいことは、「人生の道標」をどの様に見るか、考える道標なのです。ここで少しデッサン（美術用語）について述べてみましょう。デッサンとは美術教育の基本で、誰しも美大に入れば一年生で習う教科です。もっとも美大に入学するにあたり実技としてはとんどの芸術大学ではデッサンが入試の科目に入っていますので美大に入る前から学生は訓練しているわけですが、ただ石膏像を木炭、鉛筆を使って色々な角度から測り、写し取るといった作業ではありません。本質を見つけたし物事の真理を体験するための極めて基本的な作業の一つなのです。ですから例えデッサンが上手に描けたとしても「良い画家にはなれない」と言われてきたのです。

私は妻が室長をしているアトリエ・バラで一緒に生徒の指導に当たっておりますが、時おりお母さん方に「一週間に一度絵の教室に通わせても絵が描けるようになる物でもなく、日々の家庭の中で芸術に触れるこ

とによって子供達は目覚めるのです。」それから「外国映画を見たことがありますか、大抵の部屋になんらかの絵や写真などが掛けて在ります。貴方がたの自宅にもそれらに匹敵する様な作品が在りますか?」「私がインテリアデザイナーの頃、主婦の人達は必死で新築の際の壁紙を選んでおりました。壁紙を必死で選ぶりは、安い無地の壁紙を選びその浮いたお金で本物(本物とは有名な人の絵画でなくても、子供の絵でも、アマチュアの絵でも良い。イミテーションではいけない)の絵を一枚買って壁に掛けるという気持ちが大切です。」また「よくお母さん方が家の子は音楽を習っていますと言いますね。よく聞くとほとんどがピアノのお稽古けいこです。ピアノのお稽古は音楽でしょうか?ピアノは、我々で言うところのデッサンにあたります。」そして「デッサンは芸術その物ではないのです。『芸術とは何か』を身に付けるための基本的技術であって、ピアノも同じく、音楽全般から言うところのごく限られた技術なのです。オーケストラを御覧なさい、あれだけの洋楽器があり、その外に、日本独自の楽器や世界中の国に民族楽器があります。楽器の外にも作詞、作曲、編曲などすべてを称して音楽なのです。もちろん芸術も同様です。」すなわち「日々の活動の積み重ねが無くしては芸術も音楽も理解など出来ません。」と私は説明しております。

物の見方とは大変難しいもので、大抵の人はこの見方の違いにより、意見の食い違いの元になっていることに気が付かないでおります。有名な話で、ここに三人の眼の不自由な人達がいたとします、この人達が象に触れてみて一人は鼻に、一人は足に、一人は尻尾に触れて言った感想は、そうです、三人が述べた感想はまちまちの意見で喧嘩けんかになるかも知れません。前にも述べたようにデッサンとは物の本質を見極める訓練で

す。

私どもの美術教室は三階にあるためにとても見晴らしが良く、晴れた日などは上毛三山が一望に見渡せ^{せま}ます。その山々を見てみると、とても近くに迫^{せま}って見えたり、また遠くに見えたり、霞^{かす}んで見えたり、毎日違^{ちが}って見えるのです。しかし良く考えてみるとアトリエから山々までの距離はいつも同じ距離、同じ様に存在していることに気が付くはずです。人それぞれの感情で山々の感想を述べた所で、山々にとっては迷惑な話です。しっかりと山々の存在を認識して、感情のままに物を見、判断することはとても危険な事なのです。デッサンの授業で教授に度々言われたことは「石膏像を回り回^{まわ}ってみて、良く手を洗い石膏像に触れて御覧なさい。」と言うことでした。すなわち見るといふ事柄は「眼で見る」「手で触れて見る」「味わ^{あじ}って見る」「心で見る、心眼」「経験して見る」「耳にして見る」と以上のようにすべてを指して言っている言葉なのです。大抵の人々はこれら見るといふ行為の一つか二つで意見の交換をするため、眼で見ただけの人として触れてみた人ではおのずと意見の食い違いが生まれて来ます。私が小学校のPTAの副会長をしていた時、お母さん方にこんな話をしたことがあります。「お母様方は自分の子供は良くなって欲しいと願^{ねが}っています。しかし一人ひとりの親達の子供が良くなって欲しいと言う言葉の、良・く・な・る、という言葉の意味は少しずつ解釈が異なっていますませんか？勉強ができて、良い学校に、良い会社へ。身体が丈夫で、思いやりのある子。などと一口に良い子と言ってもそれぞれ皆さん見方が違っているのではないでしょうか？」言葉とは日本語、外国語を問わず大変難しいものです。果たして言葉だけでどれだけ意思が通じ合えるもの

なのでしょうか。

私が大学の一年のときに思いついた言葉で「画家は絵の具と筆で、彫刻家は木や金属を使い、小説家は文字を使い、音楽家は楽器その他を使い自分を表現し意思を伝える。」

今日のような日本で教育が徹底^{ていつい}すればするほど何処か人間として大事なところが一つ一つ消えて行くような気がします。話は少しありますがPTAの各学校の会長、副会長並びに教育委員会の先生方との懇談^{こんだんかい}会で、私は教育長に尋ねました「教育とは何でしょうか？教えることではないのでしょうか？今の学校は知識を教えるだけで子供達を育ててはいないのではないのでしょうか？」それに対して教育長さんは「確かに言われる通りかも知れません。」「親という字も同じです。親という字はどう書くのか？立つ木を見ると書きます。しかし今の親は立つ木を見ているだけでなしに口をだす、といったようにおかしい時代になりました」と付け加えました。草木も種も蒔^まいただけでは育ちません。水をやり手入れをしながら育ちます。人間一人一人はとても弱いものです。しかし弱いといって手入れの仕方を間違えば、やはり死んでしまします。

私の大学の恩師である、建築家で今は亡き岡田哲朗氏。私は岡田ゼミを取って二年間にわたり色々のご指導して戴いた。いつも先生がおっしゃられていた言葉で「一つの事が分かれば総べてが分かる」即ち先生のおっしゃりたかった事は、ある画家が「私は絵画なら分かるが彫刻は分からない」と言ったならその画家は画家ではないということを常におっしゃられていた。画家として本当に絵画を理解できるなら、当然彫刻も

理解できるということである。一つの道を極めて行くには、一つのことだけを勉強していたのでは、理解できないということでした。学生の時はインテリア・デザインを先生に習っていましたが、「建築とは一つの彫刻である」「建築の壁面は絵画である」「建築は人間が入る器である」「建築家は彫刻も理解し、絵画も分かり、人間とは何であるかを理解分からねばならない」二年間にわたって学んだ事をここに述べることは不可能な事です。

私にとっては偉大な師であつた先生の葬儀に参列し、お焼香をさせて戴いた時に先生に次のように報告しました。「大学を卒業して十数年、大学時代先生にご指導を戴いたきましたが、やっとあの頃先生が述べられていたことが分かりかけてきました。ありがとうございます。」と。

短い期間ではありましたが、やはり私にとっては偉大な師でありました。剣持吟先生のことを述べておきましょう。剣持先生は日本のインテリア・デザイナーの第一人者・剣持勇先生の長男で、東京大学の建築を卒業なされた方で、私は図学を学んだのです。父上の剣持勇先生にも学びましたが、とにかく吟先生は父上同様厳しい先生でした。何しろ大学時代アメリカンフットボールの選手だったとかで背も体格も馬鹿でかく、私の身長が174センチ、その上から睨にらまれると震えがくるぐらいです。余談が長くなりましたが、初めての図学の講義で吟先生は「俺はお前達に、技術など教えようとは思ってはいない。物の見方、考え方を教えてやる」「技術などとは自分の描きたいものを何百枚もトレース（写し取る）して覚えろ。」とおっしゃられた。その時はあてが外れてがっかりしたものでした。なぜなら技術を身に付けるために図学をとったつ

もりでしたから。しかし一年間の講義で身に付いたものは、技術以上の物の見方の大切さだったのです。

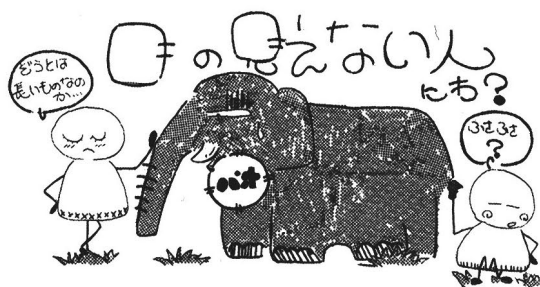
そして父上の剣持勇先生には大変おしかりを受けました。その頃は学生運動の真っ最中、校舎はビラが張られ、見るもきたない状態でした。「なぜ諸君は自分の校舎をこんなにまで汚くするのか」この言葉も忘れることの出来ない言葉です。その勇先生は京王プラザホテルを設計し、完了とともに自殺なされてしまいました。吟先生もその一年後ヨーロッパ旅行の途中交通事故で不慮の死を遂げられたのです。

人類は何万年も生き、進化してきました。しかし今日みたいに教育が人々に施されない過去においても人々は知恵を身に付け生きていたのです。その知恵とは今の教育とはほど遠いものではなかったでしょうか？現在の知識の切り売りみたいな教育でどんな人間が育つと言うのでしょうか。テストで百点を取れば生きて行けるのでしょうか。私は陶芸を志してから約十年になります。茶陶を知るために四年前から始めた茶道（江戸千家）である時月謝でおつりが必要な時がありました。ある生徒さん（生徒といっても殆ど私の通う時間は師範の先生である。）に恐る恐る大先生におつりを下さいと言ってもよろしいでしょうか？と尋ねたとき生徒さんは「江原さん、月謝という字はどう書くの。」と言われたとき、教育委員会の先生方に生意気な事を言ったことが頭のなかをよぎりました。月謝とは月に感謝する事、即ちその月お世話になる感謝の気持ちの表し方、結局その場は生徒さんにお金を崩してもらい月謝袋に入れました。後でこの話を大先生にしたところ、笑ってこう話されました。「江原さん、確かにそのとおりだけれど茶道は未だ行儀見習いの所があるから良いけれど、私はお花も教えてお花の生徒にそんなことを言ったらやめる子がでますよ。もう華道で

はなく生け花になってしまったのですね。」とちよっぱり寂しそうにおっしゃられた。私は前にも書いたように国語（漢字）が苦手だったのですが、漢字の持つ意味の素晴らしさを改めて知ったのです。ただ、学校時代は漢字を覚えろと言われただけの教育だったと思います。人々の知恵とは色々なところに残っているものですが、ただそれが見えないだけの人々が増えてきているような気がします。デッサンとは見えないところをしっかりと見つけた上で描く。見えない所が人間にとって一番大事な所なのかも知れません。次の話もPTA時代のことですが、ある時保健委員会の集まりで、お母さん方と校医の先生方の話し合いでいつものようにデータをもらい討議をしました。身体のことばかり即ち見えている所の話ばかりで少し飽きてしまいました。見えない所の話は出てこないのです。見えない所とは精神的な所です。昔から「病は氣から」とも言われるように子供達の精神からくる病については話が出てこないのです。私が提案したところ校医さんも多少話をされましたが、核心には触れずじまい終ったのです。日本においては私が子供の頃から精神病即ち心の病気についてはタブー視されてきたのです。昔から臭いものには蓋をしろふたということわざがあります。蓋をして見ないようにするのですが、現代では臭いものがそこにあっても分からない時代になってしまったのでしょうか。余りにも日々生活が忙しすぎるのでありましょう。私も妻もその一人です。

この項を最後にまとめてみると、物の見方についてあらゆる角度から見るとは（見るとはこの項の前にも述べましたが眼で見るだけではありません。）、そしてそれらをどのように判断するか判断力が最も大切になって来ます。過去の人々が作り出した知恵の中に学ぶべき所あるいは批判すべき所をしっかりと判断すべきバ

ワ―を身に付けて行くことが人間として生まれてきた私達がなすべきことだと思います。



生まれてくる
文明と文化



物の見方の項の最後に述べた言葉のなかに「生まれてきた私達」とあるように「生まれる」という言葉について考えてみます。生まれるという言葉は非常にあいまいな言葉です。国語辞書を引いてごらんさい、何と書いてありますか？もとより言葉そのものはあいまいな点が多いのです。又、言葉については後ほど述べる事にして、生まれてくるという言葉は、人間が作った物を指して言う言葉ではありません。子供を作る、野菜を作る、果たして作るのでしょうか？作るとは車を作る、テレビを作るといったように始めから最後までコントロールしながら人間が作る物です。子供の姿、形、あるいは頭のできふで、あるいは野菜の姿、形、味までコントロールして作り出すことが可能なものでしょうか、いいえ生まれてくるものなのです。その生まれてくる要因に手を貸すのが人間あるいは宇宙的規模の大自然だと思っています。

生まれてきたからこそ、この本を読んでいるのです。まずしっかりと自分が生きて存在している事を認識することが大切です。そしてまた、生まれてきた者には責任がない事もしっかりと認識しておくべきでしょう。なぜかと言えば、自分の意思でこの世のなかに産まれ出ずる者は存在しないからであります。分かりやすく言えば、あなた自身生まれたいと願って生まれてきたわけではないでしょう？

今ではもう亡くなった人間国宝の陶芸家、益子の濱田庄司先生の言葉で私の好きな言葉のなかに、「形は轆轤ろくろに委ね、絵付けは筆に委ね、焼くのは窯に委ねる」、あるいは「作った焼き物でなく生まれた焼き物」と述べておられます。ここでいう「作った焼き物でなく生まれた焼き物」とは、濱田先生が自分の畑の茄子なすや胡瓜きゅうりを見て、次のように仰られました「私の焼き物よりすばらしい、生まれてきたものには負けてしま

う。」。そうです、陶芸とは他の工芸や芸術と違って、窯という女性の子宮に似た道具を使い、出産つまり窯たきを行うのです。ゆえに濱田先生は「作った焼き物でなく生まれてきた焼き物」を作りたいと願ったのでしょう。

ここで生まれるという題材からはずれますが、濱田庄司先生の言葉をいくつか述べておきます。「私は陶技を修得するのに、十年を要したが、それを洗い去るのに二十年かかって、ほぼその域に達することができたように感じる。」「物事には何にでも裏、表があると疑ってかかれ」「仕事にしても、真っ向から人と競い合い頂点を目指すのが表なら、人の気付かぬ所に狙いを定めるのも一方。」「世の中先人の残した仕事を良く知る事により、また、未踏の領域が発見できるもの。」「さて君は表にするか、裏にするか。」「また、浜田先生の息子さんの話のなかで、『父の晩年になります、私の仕事もどうにか形になり始め、時々、父の批評を仰ぎますと、これが毎回誉め言葉ばかり。お弟子さんの仕事には大変厳しい父でしたので、「親父も末息子の作った物はなんでも良く見える程、甘々なの?」と尋ねてみたところ、「馬鹿な事を言うもんじやない。お前は誉めなけりゃ仕事を続けなから誉めているんで、叱ってのびるなら、とうに叱っているよ。』と、大きな一本を取られてしまいました。(ガラス工芸作家濱田能生)』

少し「生まれてくる」という題から外れてしまいましたが、物の見方としてとても大切な言葉なので、あえて載せておきました。次に副題の文明と文化の面から生まれてくる事を考えてみましょう。

文明と文化

文明と文化、この言葉でかなりの出版物が取り上げられていると思いますが、私が述べたい事は、学術的な見方でなく私の感性で見てみたいと思います。文明が生まれる、文化が生まれる。どちらも最後につきます。しかし生まれ方が違っていることをしっかり認識しておかなければなりません。今の人達（私の住んでいる日本全土と言っては広すぎてしまうので、ここでは群馬、関東地方ぐらいに絞っておく。）は、文明の力に振り回され何をするべきか何を考えるべきかを見失っているのではないのでしょうか。文明とは世の中が開けて進んで、便利になること、・・・開化。文化とは人類が理想に向かって進み、世の中が開けていくこと。宗教、道徳、学問、政治、経済、技術などをまとめている語。などと文明と文化について辞書で説明しているように文化のなかに文明の語源がふくまれております。文明も文化も同じような意味合いで使われておりますが、ここでは二つの意味を分けて考えてみましょう。文明とは、人間が作り出した道具の世界、道具の技術革新を指すと考えたらいかがでしょうか。例えば自動車の機能の進歩とか、テレビ、コンピュータなどの技術の進歩、水道をひねれば水が出るなどのような事柄を文明と考えるべきでしょう。その見方のほかに直接、人間の考え方の進歩から生まれる世界、例えば芸術、音楽、スポーツ、宗教などを指す事柄を文化ととらえておきましょう。まずここでは、文明の事柄に関しては後のテーマで述べる事にして、少し「文化とは何か」例を挙げて考えてみましょう。着物、着付けの学院あるいは料理の学院なる物は何でしょうか？人間が生まれて今日に至るまで衣食住の衣食に当たる部分です。日本人は過去の時代において、すべての人々が

着物を着ておりました。明治維新後文明開化の名のもとに急速に着物文化が衰え、今では着物を着るためあるいは着せるために、お金を払って学校なるものに通うようになったのです。外人が日本文化を知る上で通うというのなら話は分かりますが、もっと奇妙な話は料理の学校である。料理の学校に行って何を学ぶのでしょうか。私が今日の料理の学校の内容を見てみると、どうしても科学の実験のように思われます。人間365日、朝昼晩と食べ物を楽しんでいます。それも人類誕生（過去は一日三食ではなかったかも知れないが）のときからです。北大路魯山人という名だたる料理人であり、書道家あるいは大陶芸家でもあった方で、その言葉のなかに「料理とは理を計ることなり」と述べておられます。

今日の文化とは、各種の色々な学校を指して言っている様にさえ思えます。お金で文化が買えるのかな？私の通うあるお茶の稽古の日、大先生がお弟子さん達に「貴方達何十年お茶を習っているの、お茶の形ばかりに気を取られて、お茶は御客様においしく飲んでいただくことに気配りきはいをする事。」とおっしゃった。また何年前テレビでなんとか弁当チェーンの取材があり、その中で野坂昭如氏のインタビューがあったが「あれは料理ではない、空腹の時腹が一杯になればいいと言うのは餌です。料理とは、母親が子供達におにぎり一つを握ってやる、この事のほうが料理ではないでしょうか。」と、そのような事を述べておられた。私も飲食店（お好み焼き響陶きようとう）を始めて五年、いつも思い出す言葉です。また、よく私のお店のアルバイトの大学生達（ほとんど県外から）に話すのですが、「人間同士の会話は環境の違いで、話を合わせるのが難しいものだ。」と、そして北海道の子に、「もしも貴方が九州で、違う両親もとの許で育てられれば、今の貴方

は存在しないし、また外国の場合でもアメリカ、ソ連と別々に育てばかなり大きな考え方の食い違う子どもが育つでしょう。」「人間は、生まれた場所や環境に大変左右されるものです。」。

文明も文化も人間あつての文明で文化であることを理解認識し、先に述べましたように自分が生きていること、生まれて来たことをしっかり認識して次のテーマに進んでください。何故くどくどと、生まれて来た、生きている事を認識して欲しいかといえ、人間病気にならないと自分の健康な状態がいかに有り難いかを理解できないと同様に、私たちは、ふだん生きていることをなかなか理解認識しないで生きている。ここで再認識していただきたく書き加えておきました。

生まれたての赤ちゃんの眼はとっても澄んでいて綺麗な眼をしています。動物達の眼も同様に澄んでいまきれいす。人間、年をとるにしたがい眼は濁り、曇って行きます。以上のような事からみて、なんらかの因果律のいんがりつ結果育って行く過程が大事になってくるのではないでしょうか。生まれてきた過程とは、時間の流れ。

ここで私事で恐縮ですが、簡単な経歴を書いておきたいと思います。

今までの文章の中でも時々職歴などを書いてきましたが、ここで少し整理をしておきましょう。昭和二十五年群馬県前橋市に生まれ、和光大学人文学部芸術学部。一時は教職過程をとり教師志望。インテリアデザイン専攻、四十七年卒業後インテリア・デザイナーとして職に就く。オイルショックにより建築界を四年で断念、興業界（映画館）勤務八年間に及ぶ。大学卒業後趣味で版画（エッチング）を行っていたが、五十四

年より独学で陶芸を志す。五十六年興業界を退社、五十七年有限会社響を設立。会社は食堂部門として「お好み焼き響陶」、教室として「美術教室アトリエ・バラ」、工芸品販売として「自作の陶芸販売」とすべて人任せに出来ないような零細企業を営んで現在に至っております。

私は人によく「貴方は何が本業ですか？」と尋ねられるのですが、答えるのに大変苦労します。陶芸についても同様に「何焼きですか？」と尋ねられます。日本人はやたらと一つの職業や名前にこだわる国民ですね。お店を営んでいるときは「マスター」、教室を営んでいるときは「先生」、陶芸を営んでいるときは「陶芸家」、呼び名は私にとってはなんでも結構なのです。今書いている本の製作をしている私は何と呼んだら良いのでしょうか？要するに今自分は何をしているのかさえしっかり把握して仕事をしていけばよいのです。

また多くの方がこう尋ねます「何年ぐらいやっておられるのですか？」と。十年やっていても出来ないものは出来ないのです。二〜三年でも出来る人は出来るのです。その点をはっきり区別できない国民性が日本人にはあるようです。

人間とは何か

愛と恋の違いについて



愛と恋の違いについて

私や妻の学生時代といえは七十年安保の時代で大学紛争たけなわの時でした。私はノンポリ（ノン・ポリ ティカル「非政治的な」）の方でしたが、周囲の友達が関係していたために日々、朝方まで討論をしたものでした。私の大学は前にも述べましたが東京の和光大学で、芸術学科に籍を置き、一クラス三十名で四クラスありました。私が二年のときに今の妻、一年後輩で同じ芸術学科に籍を置いていた彼女と知り合ったのです。妻は山口県岩国市の出身です。そして私が三年生の昭和四十五年十二月、暮れもおし迫った二十七日結婚式を挙げたのです。交際を始めて一年と三カ月、お互い二十歳で学生結婚でした。

ここで私達のなれそめの云々は別として、始めに副題の愛と恋との違いについて私の物の見方から入って行きたいと思います。

人間誰しも幼いときから、人や或いは人間以外の動物（犬や猫……など）を好きになり、恋をし、愛を知りその結果、辛さ、悲しさ、はかなさ、怒り、感動、喜びといった色々な感情を体験して行くわけです。

私も同様に中学、高校、大学時代と恋をし失恋の痛手を繰り返したものでした。大学の一年の時「愛、愛するとは何なんだろう。恋、恋するって何なのか。」真剣に考えたものでした。そして三年の歳月の結果私なりの愛と恋との違いの「物の見方」としての解答を見つけ出したのです。

始めに、私が到達した愛と恋との違いの結論から述べておきましょう。

『愛とは時間のなかに生まれ育つもの、恋とは時間の停止した状態』と、結論に達したわけです。では具体的に考えていきましょう。

まず『恋』について、人を好きになると胸が苦しく、切なく、何も手がつけられなくなったりします。日本の文学史上、たくさんの歌（：源氏物語や百人一首から現代の流行歌まで）に歌われておりますように。それでは貴方が恋をした時、そして失恋した時、どのように対処し考えて行けば良いのでしょうか？群馬県の草津節にもあるように「お医者様でも草津の湯でも恋の病は、こりゃなおりやせぬよ、ちよいな、ちよいな。」心の病なので簡単には治りません。ではどうしたら？まずその前に、失恋をした時は？

もう二十年も前になりますが、テレビ番組で「青春とは何だ」という番組がありました（実を申せば私はこの番組を見て、教師になる事を熱望したものです）。あるストーリーの中でサッカー部の選手が彼女にふられ、先生に「こんな悲しいとき、先生はどうしましたか？」と尋ねたとき、先生（たしか俳優は夏木洋介でした）は「俺もたくさんの女性にふられてきたが、この世の中男と女が半分ずつ、また新しい彼女を捜すようにした。」そして「時が忘れさせてくれる、時が解決する。」たしかそのような答え方をしていたと思います。

恋とは、眼で見る事も手で触れる事もできません。私は妻との交際中、色々な事があり、世間一般の人と同様に、友であった山川君（彼は同じクラスではあったが一浪していたため一つ年上であった。）に、よく大学の食堂で話（愚痴^{ぐち}）を聞いてもらっていた。ある時突然彼がおこりだしたように「お前の話をいつも聞

いているが、俺が彼女とつき合っているわけじゃないんだから、今ここで俺が何を言ったって、なんら解決などしないだろう。」「お前の話は俺に愚痴を言っているか、のろけを言っているかにすぎない。」「愚痴を聞いてくれというのなら聞いてもやるが、ここで話をしていてもお前と彼女の問題はなんら解決しないし、一步も解決に向かつて前進などしていかない。」「と言われた時、頭を一発殴られたような気持ちでした。またあるとき、一人喫茶店で岩波新書の「愛とは何か」という本を読んでいたところに、どこかかと女性三人組のクラスメイトが入って来てしっかりと野次られました。「またそんな本読んでの?」私はその場で読みかけの本をゴミ箱に捨てたのです。その中の女性一人は現在フランスで幸せな家庭を築いており、この本にも後程登場してもらいます。

山川君との会話の後私がとった行動とは、まず一つの方法論を立て行動に移しました。毎日封書を彼女に書き続ける事でした。一カ月以上続けて書いたのです。今考えると恋をしている時とは人間恐ろしいもので、何を毎日書き続けたのか、今では思い出せません。一カ月が過ぎ、ぴたりと封書を出すのを止めました。人間、毎日毎日同じ人から封書が来る。内容などはともかくとして、毎日来ていた物がある日突然来なくなる。その時、毎日もらっていた人は何を思うのでしょうか。

そうです、私が行った第一步とは封書を毎日書く事だったのです。結果はどうであれ、頭で考え悩んでいるだけでは一步でも踏み出さないかぎり何事も解決しないのです。

人を恋するとは、前にも述べたように人間の眼によって確かめることは出来ません。形としては、交際、

何かを相手にしてあげる行為ぐらいでしか眼で確認は出来ません。

少し話がそれて行きますが、結婚するとは男と女がお互い好きになったから（恋したから）結婚するのでしょうか？では、嫌いになったから別れる（離婚する）のでしょうか？現在には余りにも簡単に考え、いや、考えずに行動するといった方が適切かもしれませんが、そのために欧米並みに四組に一組が離婚をしているようです。

山川君との会話の一件以来、考えるだけでは駄目で行動しながら考えるのだと悟った私がその時頭に閃いたことを述べておきましょう。鉄道のレールが浮かんできたのです。私の高校時代の自宅は電車の踏切の隣にあったのです。電車のレールは度々人生の道にも例えられますが、私も自分の人生の道にあてはめてみたのです。

レールは常に平行線を保っています。そうです、もしもレールの片方が内側に傾いたり、あるいは外に向かって広がれば車両は脱線してしまいます。そこで考えた事は、一本のレールは男にとって仕事、もう一本は家庭。仕事ばかりでレールが外に向いてしまったり、マイホームパパでレールが内側に向いてしまったり電車は脱線してしまうのです。それからもう片方のレールは家庭で、そのレールに必要な人（女性）か否か？考え抜く事によって結論を出すべきでしょう。以上のように考えた結果、私は彼女、つまり今の妻と結婚し、あっという間に十八年の歳月がたってしまいました。

人間何かの決断を迫られた時、やっても後悔するし、やらなくても後悔します。たぶん人間は後悔する様

に出来ているのでしょうか。しかし感情だけ、あるいは理論だけで判断するのではなしに、生まれてから現在に至るまでの経験をフルに生かし、未来を予測しうるだけ予測してから結論を出す（行動する）べきである。「そんな事を言ったら、人間は未来など予測できないし、無理だよ。」などと言う人があるかもしれないが、始めからやる気のない人間に何を言ってもわかるはずも無いし、考えて行動した結果がどうであれ、後悔の度合は最少限度に食い止める事になるでしょう。すなわち自分のしたことに責任を持つということです。他人が出した結論に従えば後悔も大きいし、責任も回避したがる結果となります。

以上のような事柄から見て、恋についてまとめてみると、まず始めに述べたように心の病です。男が女を見て「いい女」、女が男を見て「いい男」、ペットを見て「可愛い」、他人の赤ちゃんを見て「可愛い」すなわち一瞬にして起こる感情の世界が恋なのです。

それに対して、時間の積み重ねの中から生まれてくるものが愛なのです。愛という漢字は誰に聞いたか定かではありませんが、日本語には無かった言葉で、明治に英語のLOVEを翻訳するに当たって「愛」という漢字をあてはめたとか。確かに言われてみれば、昔は恋文とか言って愛文とは言いません。（今の様な意味を持つ愛という言葉は日本には無かったと聞いたと書きましたが、私はその道の専門家ではないので間違っていたらすみません。）この愛と恋を、文明と文化の言葉のように、ごちゃまぜに使って現代は意見の食い違いが生まれているように感じます。

映画やテレビの洋画を見ると、I LOVE YOUとI LIKE YOUをしっかり使い分けし

ています。私は、俺は、彼を、彼女を、愛してしまったという台詞をよく聞きますが、それは恋してしまつたの誤りだと思ひます。今の時代は「愛」の大安売りの時代です。愛とはそんなに簡単な事柄でなく、恋と決定的に違ふ点は、決して心の病ではない事だけは確かな事なのです。

人間とは何か

だいが副題が長くなつてしまいました。主題の「人間とは何か」これがこの本の中で一番難しいテーマとなるでしょう。

私の大学時代、先にも述べましたが政治の話、芸術論、人生論、もちろん恋愛論などについて夜通し朝まで激論を戦わせたものでした。私の大学は東京のために全国から学生が集まつてきていました。また、クラス編成も男女半々だったために男性の物の見方、女性の物の見方と一つの事柄についても、色々な見解が飛びかいました。初めはただの討論が激論になり、最後にいつも私は「じゃあ、いったい人間とは何か、何なんだ？」と、みんなに問題提起をしたものです。結局学生時代において、結論に達しなかったのです。私なりに結論に到達するまでに、八年をついやしたのです。

私が映画館の支配人をしているときに読んだ小説の中に答えの糸口があったのです。「半村良の妖星伝説第六刊」でした。ただの時代劇SFXとしてだけ捕らえてもおもしろい作品ですが、その中に述べられている一節に宇宙人が地球を見た感想が答えのヒントになったのです。「この星は何て醜い星だ、生命が多すぎる。

宇宙広しと言えどもこんな星はない。誰かがこの星の因果律を変えて、誰かに警告しているようだ。」それに対して地球人は「こんなに自然が美しく、四季折々に至るまで素晴らしい星を醜いとおっしゃるのですか？」宇宙人は「この星は人間だけに限らず、ありとあらゆる生命を持つ物は、なんらかの生命の犠牲ぎせい無しでは生存できない。」この一節を読んだ時に、私の頭の中にくすぶっていた「人間とは何か」の答えの糸口が見えたのです。糸口が見えたときの感想は、喜びよりも絶望に目の前が暗くなる思いでした。何故かって？すべての地球上の生物が何かの犠牲、すなわち弱肉強食（草木に至るまで例外ではない）の中でしか生きられないとは「人間とは、救われない。」「地球上すべての生き物は、救い様がないのか。」その問いに迫られたのです。その時に頭のなかに浮かんで来た一文字がありました。「愛」という一文字だったのです。地球の誕生以来無数の生命体が生まれ、滅んで行った歴史のなかで、もしも命あるものが「どうしようもなく、救われないもの。」ならば、いずれかの時間（歴史）の中で完全に滅んで行くでしょう。恐竜時代のように。恐竜は気象の変化について行けなくて滅んで行ったと聞いておりますが、人間はなんの変化について行けないで滅んで行くのでしょうか？二十世紀後半の日本は、また日本人は色々な意味において二十一世紀、二十二世紀と地球上に存在しているのでしょうか？

大学時代に教職を獲得するための必修教科の中に教育原理、教育心理学なる教科があります。その中で特に心に残った言葉は「道徳とは時代時代で変化するもの」です。例えば、明治、大正、昭和、時代時代で変化しております。つまり道徳とは、教育と切っても切り放せられないからです。戦前の教育、戦後の教育、

全く内容が変わりました。戦後の教育も私たちの習った教科書の内容と今の内容ではだいぶ変わってきてお
ります。PTA活動で学校に行きましても表向きは変わらないようでも、全く内容の変化には驚かされまし
た。つくづく教育の恐ろしさを感じます。昔の新聞記者のドラマの中で「ペンは銃より強し」といった台詞せりふ
を思い出しますが、教育は核兵器、癌がん、今流行のエイズより恐ろしいと思います。使い方一つで善にも悪に
もなるからです。人間モラル（道徳）で考えるよりも、ヒューマニズム（人間性）で物を見て行かないと。
二十一世紀は「……………」どおなるのでしょうか？

私はあまり宗教の勉強はしておりませんが、地球上に存在する教えの数々が「愛」について語っておりま
す。また死についても。「生まれてくる」の章の最後に書いた言葉の中で、「人間は何かの因果律の結果生
まれて来た」と書きましたが、また、何かの因果律の結果死んで行くのです。因果とは、すなわち『原因と
結果』を指す言葉。この言葉のなかにこそ真理が隠されております。因果については、また後で述べるこ
とにして。

宗教の教えもとらえ方によっては妖星伝の中に出てくる宇宙人の言葉と同様に、人間一人一人に警告を与
えているのかも知れません。人間を含めてすべての生命は生まれて死ぬ、あ逢えば別れる、初めがあれば終わ
りがある。ローマは一日にして成らないが、ローマは滅んだ。数々の文明が生まれ、そして……………滅ぶ。
神の存在を認めれば悪魔の存在も生まれてくる。ゆえに人間の一人ひとりの心の中に神と悪魔が共存する
のです。宗教を信じている人にとって、信じていない人は悪なのでしょうか？真理とは？絶対とは？在りう

るものなのでしょうか？私はあると信じておりますが、まだ見えていません。第二章に述べた「物の見方」に関連してきます。昼間働いて夜寝る人と、昼間寝ていて夜になって働く人二人の人間が働くことを論じ合えば、当然お互いの見解の相違は生まれてきます。

警官と泥棒、立場が変われば同じ人間なのに、全く表と裏のごとく意見が違います。泥棒にも三分の利とか言いますが、それぞれの言い分から生まれてくるものです。しかし、言い分とは真理ではありません。ある一部分から見た物の見方にすぎないのです。

ここで少し見方を変えるだけで真理の一片が見えてくると思います。昼間働く人、夜働く人、地球上での一日とは、日が昇り、日が沈むまでではありません。日が昇り、日が沈み、また日が昇るまでが一日なのです。その一日のサイクルで働くことを論じ合えば真理に近づく事となるでしょう。

「人間とは何か」地球上に住む動物です。生物です。動物の中でも哺乳類とか呼ばれており、オスとメスから成り立っています。人間とは眼で見てもお分かりのように、全く構造の異なった男と女から成り立っております。以外と以上述べた基本的な真理を忘れて、現在の男女問題を論じているような気がしてなりません。

例えば、労働の問題で男女同権と叫ばれ、法律もだいが改正されて来ましたが、私は何処かおかしいかと疑問に感じます。同権とは漢字のとおり権利が同じという意味です。男性と女性と同じなのでしょうか。

前にも述べたように全く構造もつくりも違うのに、同じ物差しで測れるものなのでしょうか。ここで少し物差しに触れておきましょう。物差しとは皆で集まって一定の眼で見えるルールを決めてそれを使用して行く、即ち道具の一種であります。その物差しという道具を使って男性、女性を測るということが同権につながるのでしょうか。

私の勝手な論理になるかも知れませんが、一言述べておきます。

同権とは同じような物どうしを比較する時に生まれてくる言葉で、例えば男性同志、女性同志の同権を論じ合うべき物だと思えます。同じ性質の物どうしの同権を論じあうなら話は分かりますが、全く違ったものどうしを同権の定義にあてはめて論じ合うから矛盾が生まれてくるのです。例えばボクシングのようにランクを分けて戦うのなら、そこには同権の論理をあてはめることも、可能になって来るでしょう。

誠に極端な例で恐縮ですが、人類と猿類が似ているからといって、そこに同権をあてはめて論じ合ってどうなるのでしょうか。お互いの権利を主張する前に、お互いの立場をもっと尊重しなければ何も解決などしないのではないのでしょうか。

同じ物差しで測って、何が測れるのかな？

今は亡き和光大学学長梅根悟先生が、私の大学の入学式のおっしゃられた言葉です。「皆さんは、何をしても自由です。しかし自由とは何か、何をやっても良いという事と意味を履^はき違えないように。自由

をとる権利は誰しもあるが、その権利を得るには、それと同等の義務を遂行できて初めて自由を得るのです。ですから人それぞれ自由の大きさは異なり、又、それを測る物差しもありません。」この言葉は、私にとって高校時代まで抱いていた自由の定義をくつがえし、なおかつ本当の自由について目覚めさせてくれた言葉でした。それまで中学、高校と父母や友達との会話で「そんなこと俺の自由だ」とよく自由という言葉を使ったものでしたが、その言葉は「そんなこと俺のわがまま」あるいは「勝手だ」と言い直さなければなりません。「自由」と「わがまま」、「勝手」とは、前の項で伸べたLOVEとLIKEの違いのように全く別の意味を持つことを、しっかりと頭で整理しておくことが必要です。

すなわち人間とは非常に曖昧あいまいなところで妥協たきようし、規則（法律、政治、教育、その他）によって生活を営んで行くために、本音と建前で矛盾だらけの生活を余儀なくされているのではないのでしょうか。その本音と建前の生活に物質文明がより拍車をかけ矛盾を大にしているのです。

少しテーマからずれて行きますが、人間一人ひとりの物の見方の違いを具体的に考えてみましょう。まず私のお店に来るお客様にこんな話をします。「お客様はテレビの料理番組を見て、ああ、あの料理はああして作るのか、分かった分かったと言いませんか？それは分かったのではなく、理解したのです。分かったとは自分で料理をしてみても納得なつとくがいったときに初めて分かったというのです。」次も私の体験から得たことですが、ある時お店がいそがしく次女の明日香が手伝いにきていた時です。（小学校五年のときです。）あまりにいそがしく、目の前の品物を取るようになったのですが、なかなか取ってはくれません。つい、どなっ

てしまったのですが、ふと気がついて、背が小さいので見えていないのか？と私は背を屈めてみました。明日香の背では見えなかったのです。その時私は非常にすまなかったと思い、明日香に謝ったと記憶しております。よく「子どもに何か言う場合、子供の眼の高さで物を言いなさい。」と言いますが、それを痛烈に体験したのです。小さきものといえども子供から学ぶことは多々あります。私の美術教室でも、子供達の眼の高さに眼を置いてみると、園児などは特に狭い範囲でしか物が見えていないのが良く分かります。即ち、子供から見た大人、大人から見た子供、全く異なる立場で物を見ているケースが多々存在するのです。次の項で述べる「学問とは何か」という問題と関係しますが、アトリエ・バラ美術教室で指導をしている時によく生徒に言うことです。まず、テーマを決めてクロッキー帳を与え製作が始まります。紙粘土や陶芸製作も同じような行程で始まる訳ですが、ここでよく考えていただきたい真理の一つがあります。何もない（無）、何も描かれていない紙、ただの粘土の固まりから子供達あるいは大人の生徒さん達によって形が生まれてきます。そこでこういった質問が出ます。「先生なかなか形にならない」「どう描いていいか分からない」「色は何色にするの」などと、その外にも多々質問は出てきますが、そういった質問の中には、皆と同じにできないというジレンマも含まれています。特に高学年あるいは、大人の人に多い傾向です。そこで私は生徒達に聞きます。「回りの皆の顔や体つきをよく見てごらん、同じ人がいますか。」「同じ学年でも大きい人、小さい人、丸い顔、四角っぽい顔、色々な人がいるだろ。」「だったら、何故同じ絵を描かなければならないのか。」「同じ物を造らなければならないのか。」「私の教室は、下は幼児から上は大人まで大体において

テーマは一緒です。何かの宣伝文句に「それなりに写ります」とありましたが、幼児は幼児なりに、小学生、中学生、高校生、大人と各自それなりに同じテーマでも違ってくる。

余談ですが大体において低学年の作品のほうがおもしろみのある作品が多いですね。ここで言いたい事は、人それぞれあるいは、すべての生物も同じ物は存在しないということです。指紋を取ってみても、また同じ仲間の葉っぱの葉脈も全く同じ物が無いという事柄から見ても分かるように、すべての生命には「個性」という大事な要素が秘められている訳ですが、現代において個性の存在がどれだけ重要視されているのか疑問です。

何年か前のテレビのコマーシャルで、ロボットの手（三本の指）が器用に卵を割るシーンがあり「ロボットは、ここまでできました。」というような得意満面のコマーシャルがありました。その時の私の感想は「怒り」そのものでした。なぜなら考えても御覧なさい、人間の子供だったら幼児でさえ少しやれば卵ぐらい割れます。今の教育は人間を機械化し機械を人間化しようとしている証明のようなコマーシャルです。

科学万博でロボットがピアノを弾いていました。コンピュータが絵を描いていました。機械にとって音楽とは何でしょう。コンピュータが絵を描くとは、コンピュータにとって何を意味するのでしょうか。何ら意味しない事なのです。よくお店にくるお客さんで、こう言う人がいます。「先生の窯は、薪を使うのですか」そこで私は、「ガス窯と電気窯」と答え、御客様に聞くのです（そのお客は、陶芸家は薪で焚くのが最高だと思い込んでいる。）。「御客様、たとえばここに刺身包丁と肉切り包丁があるとしたら、刺身包丁で肉を

切りますか、肉切り包丁で刺身を切りますか。どちらを使っても切れることは切れるでしょう。」そして、「それではまた、木の生えていない土地（国）でも陶芸はあります。それで燃料はと言えば家畜の糞を燃やして立派な陶芸を作り出しています。」「糞で焼いた陶芸は、作品とは言えませんか？」「即ち、窯も薪も道具なのです。お客さんの家でも鍋や釜など、幾ら高い物を買っても料理が上手になるわけではないのです。」前に述べたロボットやコンピュータも道具なのです。道具とは使う人間によって良くも悪くもなるものです。ワープロを買っても文章は作れません。文章を作る能力のない人には、ただの箱なのです。ただの箱より始末が悪いかもしれません、なぜなら箱ならば物が収納できるからです。

よくこういう話を聞くことがあります。今度の作品は土が悪かった、窯が悪い。思ったようにできなく作品を割る。よく考えてみると、すべての責任は製作者にあるわけです。なぜなら土は焼いてくれと頼んだわけではありません。窯にしても道具の使い方が悪かったわけで、窯の責任ではありません。ましてや失敗したから割るとは、じゃあ、自分の子供が失敗品だと思えば殺すのかと聞きたくなります。

旅客機が落ちた、沈まないはずの船が沈んだ、車の交通事故、皆当たり前（当然）の事ではありませんか。
かたまり鉄の塊が落ちる、沈む、ぶつかれば壊れる。すべての責任はそれを作った側、使用する側、即ち人間にあるのです。一時話題になった豊田事件にしても確かに騙すほうも悪いが、騙されるほうも欲に眼が眩くらんで騙されるわけです。儲かる話なら人に言わずに自分であるのが当たり前、眼で見えるもの、耳で聞いたもの、決して真実とは限りません。

前のページで「何もない（無）、何も描かれていない紙」という一節が出てきましたが、ここで少し「無」とは何か、人間にとって何か、考えてみましょう。

陶芸を始めて窯を持った時、まず窯の名前をつけました。私の名の重雄の重の一字をとって重光窯と命名しました。陶芸を志していくうちに「無」という一字が目の前に大きく立ちふさがってきたのです。「無心」心を無にする。「無欲」欲を無くす。

今は亡き陶芸家の河井寛次郎先生の言葉のなかに「仕事の仕事をしている仕事」という一節があります。生まれてくるという項のなかで登場した浜田先生の言葉「形は轆轤ろくろに委ね………」と類似することですが、仕事の仕事をしているとは、私（人）が仕事をしているのではなく、仕事そのものが仕事をしていかなければ仕事ではない、という事だと思えます。人が轆轤を引いて形を作るわけですが、「轆轤が轆轤している轆轤」ということになります。即ち人が作品を作っている人も人の存在を無にして、人がその轆轤そのものになる。剣道の奥義に何かこれに似た事を聞いた事があります。剣を構えた人が剣の後ろから消えて剣のみしか見えなくなる。動物が気配を消し、自然のなかに溶け込む。

無とは、何もないという事と違います。存在しても見えないのです。何だか禅問答みたいになってきましたが、仕事という言葉もよく見ると事に仕えると書いてあります。会社に仕えるのでもなし、上司に仕えるのでもなく、事に仕える事、即ち仕事なのです。

展覧会に出して入選するために仕事をする、人に褒めてもらいたいために、そんな絵を描く。両親がうる

さいために、親のために勉強する。お金のために仕事をする（お金とは、仕事をした結果報酬としてもらう権利が得られる。）。現代においてその他数多くの事がらが真理と言えるかどうか分かりませんが、あえて真理と言わせてもらおうと、その真理から程遠い目先しか見えない現実の世界になってしまっているために、前にも述べたように心のなかに矛盾が生まれ、ストレスがたまり、人々のなかに疑心暗鬼ぎしんあんきが生じてくるのです。

無を論じるのに欲、欲望という言葉と比較してみると無という言葉がよりはっきりと見えてきます。食欲、性欲、金欲、物質欲、名誉欲、その他色々な欲望が人間のなかに渦巻いています。もしもそれら本能（煩惱）だけで生きていたら、前にも述べた「救いようのない生き物」として歴史（時間）の中で滅んでいたでしょう。しかし、今現在においてもいつ滅びの道に落ちて行くか、破滅と生存と紙一重で人間は生きているのです。剣道、柔道、武士道、華道、人の道、日本人は道を重んじてきた国民です。

剣道はちゃんばらごっこでしょうか。柔道は投げっこの勝った負けたの格闘技でしょうか。華道や茶道もただ形の上だけのものでしょうか。仏教でも述べている無の境地「悟り」、人間生きている間には、煩惱ぼんのうに邪魔され悟ることは出来ない、と述べている方もおりますが、人間悟りに近づく事は出来ます。密教等では、ただお経を唱えるだけでは悟れないと述べているように、前項の恋の所で述べたように、頭で考えているだけ、お経を唱えているだけでは、道も見えてこないし悟りにも近ずかないでしょう。人間何かを実行しながら道も開けてくるし、悟りにも近ずいて行くのでしょうか。

だいが黨の命名から外れてしまいました。昭和六十一年の一月「無欲にして、無理なく、無双なり」という言葉が生まれ、無双黨と命名しました。即ち、いつも展覧会に出して入選入賞したい。また幾らで売れば儲かるか。人の入選した作品の技術を食べるように眺める眼、それら欲望を断ち切ったところで仕事、製作をしないかぎり「仏を造って魂入れず」の例えになってしまふと気がついたのです。毎日より良い物を造りたいと願い、努力し製作に入ったときは、轆轤に委ね、土に委ねる。その時に二つとない作品無双の作品が生まれてくるのです。人間（生命体、全宇宙）の誕生そのものが無双なのです。しかし私の実感としては、そうは言ってもなかなか出来ない事が現実です。

人間とは何か、自分とは何か、永遠のテーマである事には違いありません。

中曽根元総理にある記者が、総理の任期ぎれで総理の今までの業績を振り返ってみていかがですかとたずねたとき総理曰く「歴史が答えを出すだろう」とおっしゃられた。また、私の知り合いの陶芸家の先生で瀬戸の長江惣吉先生（燿変天目茶碗ようへんてんもくちやわんという日本に四つ国宝としてしか残っていなかった茶碗の再興をなさった方、亡くなった人間国宝の荒川豊蔵さんのお弟子さん。）のご自宅に一晚泊めて戴いたとき、先生のおっしゃった言葉は「人間二十五年も一つのことを研究すれば出来るよ。」、また「俺はたまたま材料に巡り合い、運が良かったのかもしれない。」「俺の作品は今どうのこうのと批評されなくとも、百年後、二百年後の人間が見て、こんなのを造ったやつがいたのかと思ってももらえればそれでいい。」「とおっしゃられた。確かに先生の窯場に行ってみると、燿変天目茶碗の山であった。勿論その山は全部失敗作である。泊めて戴いた部

屋の棚に数点の完成品を夜がふけるまで眺め、触らせて戴いたときに二十五年の重さ、人間の偉大さを感じ入ったことは、私の生涯の思い出となるでしょう。愛と恋の違いで述べたように、愛とは時間の流れ、時には戻りません。前に進むだけです。普通人間も前に歩きます。草木ものびて行きます。過去には戻れないのです。時の流れのなかで「無」を考え、「愛」を考え、「真理」を探して行くのが人間のするべき事ではないでしょうか。もしも、それらを忘れ欲望と煩惱の世界を行くなら、時の流れはノストラダムスの予言ではないがおのずと止まるでしょう。

亡くなった妻の祖父が、米寿の祝いときに贈ってくれたみずからしたためた色紙の言葉に「反省、感謝、実行」とありました。

学問とは何か



「学問」とは辞書によると、「学ぶこと。学んだ知識。」と載っていますが、これではあまり良く分かりません。簡単に分かりやすく言う「学んで、問うこと。」です。

そんな事を言えば漢字の通りではないか、というかも知れませんがその通りです。漢字とは私なりに考えてみると、そんなに難しく考えないで、直に考えると意外に何を言いたいか真の意味が豊えてくるものです。前にも述べたように「教育」とは何か「教えること」、「月謝」とは何か「月に感謝」すること、「先生」とは何か「先に生まれる」こと、先生とは偉いわけではなく先に生まれた人で尊敬に値する人である。このくらいで漢字の事はさておき、学問について考えて行こう。

「学んで問う」その事について私は、まず妻の実家（山口県）の出身の吉田松陰（一八三〇～一八五九）について述べてみたいと思います。

松陰は長州藩（山口県）の下級藩士の生まれでしたが、後に江戸へ出て新しい学問を学び、アメリカのペリーが来たとき密航を計画し捕えられ、その後、長州に帰った松陰は「松^{しょう}下^か村^{そん}塾^{じゅく}」を開きました。そこで青年たちにこれからの日本の進むべき道を教えました。この松下村塾から、幕末から明治維新に活躍した多くの青年が育ちました。松陰の行動は幕府から警戒され、ついに捕えられて死刑になりました。一八五九年一月二十七日、まだ三十歳の若さでした。

幕末から明治維新にかけて、吉田松陰に限らず数多くの青年が活躍しました。日本国を動かして行ったという歴史的事実の中に、学問を解く鍵があるように感じます。私が述べたい事は、松陰の人柄にスポットを

当てるのではなく、「松下村塾」にスポットを当てて考えて行きたいと思えます。

一八五六年（安政三年）吉田松陰が萩に松下村塾を開き、一八五九年（安政六年）には松陰は死刑になっています。わずかに一二年の松下村塾での生活に集まって来た青年達のなかに久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、前原一誠、その他数多くの塾生が集まり松陰から何を学び、何を問うたのでしょうか。そして日本の歴史は彼らの行動により、確実に幕末から明治維新へと変わって行ったのです。

ここで少し現代に戻って学問を見てみましょう。この本を読まれている方の年齢によって異なりますが、現在は六、三、三制の教育が行われています。すなわち小学校六年間、中学校三年間、高等学校三年間、それらの前後に幼稚園（保育園）、大学（短大、大学院）などがあり学問、教育を行っているわけですが（落としてはならない塾、教育産業もあります。）、ここで少し考えてみてください。

幕末から明治維新にかけての学問と現代の学問の違いはどこにあるのでしょうか。現代では「おぎゃあ」と生まれた時から幼児教育だのといわれ、大学まで行くとなると何年間学問を強いられるのでしょうか。まあ、それらをよしとしましょう。それならその教育のお蔭で日本中に高杉晋作、伊藤博文、また松陰の門下生ではなかったけれど坂本龍馬、西郷隆盛、その他数多くの歴史的人物以上の人々が何十万、何百万と育って来てよいはずではないでしょうか？もしも育っていないとしたら、今の学問はどこが間違っている（方法論において）のではないのでしょうか。

松下村塾についての学問とは、現代において不明な点が多いようですが、わずかに一二年という期間に

おいて、どれだけ知識が塾生に身についたのでしょうか。現代の教育内容とは全く異なっていたかと思ひます。私が思うに「学んで問う」、学問の中でも「問う」ことに重きをおいて日々の教育にあたつたように思ひます。現代の学生は「問う」ことを知りません。先日深夜、現代の大学のあり方、六十三年度の共通一次試験についてテレビの討論会を聞いていました。

東大のある学生曰く「私たちは、試験問題の解き方を小さいときから習ってきたので、解き方は慣れていますが、自分の考え方や気持ちを述べるのは苦手です。」と、インタビューに答えていました。また違ふ日同じ局の放送で韓国の大学生と日本の大学生の討論会（衛星中継）で、いろいろ韓国の大学生に日本を攻撃され、韓国あるいは朝鮮の民族問題について質問されたとき、お茶の水女子大の生徒曰く「確かに教科書で日本と朝鮮の問題は載っていましたが、テストあるいは入試に関係のあるところしか実際は覚えませんでした。」。以上二人の学生の言葉のなかに、現代の学問のあり方がはっきりと述べられています。果たして生まれたときから二十年近くも青春を犠牲にし、そればかりか教育費といわれるものは年々増し、教育産業は膨れ上がる一方で、落ちこぼれという言葉が生まれ、校内暴力、いじめ、エリート意識、良い学校・悪い学校、出来の良い子・出来の良くない子、まだまだ挙げればきりのないほどの問題を生み出している。今日の教育の方法論はこれでよいと皆さんはお思ひでしょうか。

幕末から明治維新にかけて活躍し、若くして死んで行つた人達は、現代のような日本を理想として学問をし行動して行つたのでしょうか。

学問はまた、一つではないことを次に述べておきましょう。人の数だけ、あるいは仕事の種類によって存在してくるものである。人類が消滅すれば、人類の学問も消滅する。ある国家が消滅しても多くの学問が同時に消滅する。

もとより学問とは、学とは、人間だけから学ぶものでなく、大自然の英知から学ぶことではないだろうか。また問うとは、人に問いかけるのではなしに、自分に問うことではないでしょうか。即ち自問自答なのです。もちろん自然界に問うことも当然であるし、また自然界のなかに答えがあり、当然人間も大自然のなかの恵みに支えられ生きてゆく動物なのです。

人間が作り出す機械文明によって自然が破壊され、しいては、人間みずから機械文明が生み出す公害に汚染され、滅びつつあります。そんなある地方の都市をテレビの報道番組などで取りあげていますが、これだけ教育、学問が行き届いていると言われる日本において、ますます公害が増え続けているのは何故でしょう。これまた簡単に考えれば教育、あるいは学問が機械文明のなかに組み込まれてしまったのにはかならないからです。

ここで少し今の大学生と、我々の年代の大学生の学問の仕方を比較してみましょう。何年前に私の大学の教授が群馬に来られたおり、私の自宅に訪ねてみえられ、私は教授に今の大学、大学生について尋ねてみたところ、次のようにおっしゃられました。「今の学生はとても真面目で、よく講義にも出席をし真面目に聞いている。お前達の時代は講義になどろくに出席もせず、教官室に遊びにきてはわいわい騒ぎ、あぐくの

果てに飲み连接到行け、お茶を飲み喫茶店に连接到行けなどたかられて、出費も大變だった。学園紛争で教授陣もつるしあげをくったり、とにかく今思うと懐かしい時代だった。それだからこそあの頃の学生はほとんど覚えてるしこうやって逢いに來たくなる。たぶん、今の学生なら數年後には忘れてしまふだろう。確かに真面目に講義を聞いているように見えるが、果たして私の講義を理解しているのかさえない。教官室などろくに遊びに來る生徒はいなくなつた。」と、少し寂しそうにおっしゃられた。これは何も私の出た大學に限つた事ではないようです。地元の群馬大學の先生に聞いても同じような答えが返つて來ました。話は少し外れますが、日本人はよく「あいつは理屈っぽいとか、屁理屈を言っている」とか言います。前にも本の事で書店に行くと技術書が多いと書きましたが、技術書なら納得し、哲學など理論の本となると日本人は理屈っぽいということで受け入れません。大學の講義も専門技術などには関心を示し、理論的な講義は敬遠されます。今、貴方に読んでいただいているこの本などはまさに私の論理の塊みたいなものです。大抵の人は屁理屈と決めつけるのではないのでしょうか。

實際は技術書の方が遙かに理屈の塊なのです。少し考えてみて下さい、「お金が溜まる本」「人付き合ひが巧くなる本」その他數多くの「・・・巧くなる本」それらの本を読んで巧くできるなら、そんな簡単な事はありません。「お金儲けの巧い人」「人付き合ひの巧い人」本を読んで巧くなつたのでしょうか。

理論と理屈は全く違ふ事を日本人はどうも理解できないようです。

さて大學の九十分の講義とは何でしょう。九十分の講義の内、先生の言いたい事は多分一つか二つでしょ

う。その一つか二つのために延々と九十分をついやすのです。この本も大学での講義内容に変えれば一年以上の講義がもてるでしょう。私たちの大学時代は、学生の頭が良かったのか、要領が良かったのか、九十分の講義を聞かずに教授の部屋に行き、わずかの時間で先生と討論することにより、講義で何を言いたかったのか聞き出してしまったのです。あるいはそれ以上の収獲もあったかも知れません。

松下村塾ではないですが、それに近いことを学生時代経験できたことは私にとって幸せなことでした。と同時に、私の今日の物の見方の基礎が、そこで築かれたという事にもなります。

学問の定義はこのくらいにして、テストってなんだろう。何故にテスト（試験）を行うのか。少し現実に行なわれている学問のやり方を見てみよう。

テストって何故するの？

私がテストとは何かという疑問を持ったのは、くしくも、大学に入学してからであった。小学校、中学校とテスト漬け。まあ、現代ほどではなかったにしろ、中学から高校にかけて入試と、高校へ入学してもまたテスト。高校から大学へまた入試。一応大きな山は越え、大学に入ってみると大学のテストは中学、高校より簡単だ。何故ならカンニングがたやすくできやすい。それに自分の気に入らない課目は落としても、取らなくてもさほど卒業に響かない（必修科目は別である）。大学によって文系と理系とでは内容はかなり違

ってくるが、おおむねカンニングをしない大学生はいないだろうし、あまり興味のない課目は「可」が取れば充分だと、教授の顔すら知らずに単位を取る課目すらある筈だ。小、中、高校のテストの内容と大学のテストの内容は技術的に違う。精神的にも大きな融^へたりがある。精神的にとは中学、高校のテストは理解度云々よりも、点数の結果の順位、あるいは偏差値とやらの怪物に支配されてくる。その順位、偏差値とやらの怪物によって高校入試、大学入試が決められて行く過程において精神的苦痛が生まれてくる。大学におけるテストは単位を取るか取らないか自分のモラルの問題である。

私は、中学、高校とテストの度に記憶力が良ければよかったのにと何度思ったことかしれません。英語の単語、国語の漢字、数学の公式、社会の年表、その他の課目すべてのテストで記憶力の弱い私にとってそれは悪夢そのものでした。テストの出来、不出来は問題の理解度よりも、記憶の中からいかに答えを引き出すか、例えばカンニングで百点を取っても、山をかけて山が当たり高得点が得られてもそれをよしとしてしまう。泥棒も捕まらなければ泥棒ではない（しかし本人は、泥棒を認識している。）。

テストとは曖昧なもので、その曖昧なもののために青春時代が悪夢によって過ぐすとなれば、人間何のために生まれてきたのだろう。「人間にとって青春とは何だ」と私はすべての人に問いたい。

以上述べてきたテストとは、ペーパーテストのことであるが、大部分のテストはこの筆記試験が採用されている訳である。何もテストの時に教科書を見てもよいのではないか。実社会において分かなければ辞書を引く、参考書を調べる、これは当たり前のことである。何故テストは記憶力だけを重視しなければならな

いのか。

教科書を試験の時に見ても、本当に理解していなければ、分からないはずである。

私はあるドクターとこんな会話をしたことがあります。ドクター曰く「ある手術の時、ドクターが手術中分らないところが出てきて本を調べて手術をした。見学していた私は冷や汗ものでした。」と。次に私が「その手術は成功したのですか。」と尋ねたら「一応成功しました。」と答えが返って来ました。そこで私は彼に問題提議をしたのです。「ドクターの取った処置は間違っていたのですか？本を読んで確認することはいけなことだろうか？例えそれが手術中であっても、手術中だからこそ分らないければ確認しなければならいのではないだろうか？」実はこのドクターとは、私の陶芸のお弟子さんであります。

記憶力、大学で心理学を取ったのだが、その中で人間の記憶力のことが出て来ました。人間の記憶とは、ほぼ一週間で九割近くを忘れ去ってしまうということであった（忘却曲線）。忘れない様にするには、毎日復習をしなければならない。それが今の勉強と言われる予習復習のいわれだと思えます。人間は忘れ去る事が出来るからこそ人間で、もしも辛いこと悲しいことを忘却できなければ気が狂ってしまうだろう。

そのような人間に小、中、高、大学と膨大な記憶量を要求し、テストを行う今の教育体制とは、真の意味で道を踏み外しているのではないのでしょうか。

私が映画館の支配人時代に、各高校の映画部の生徒が毎日私の事務所に遊びに来了ました。約八年間の間に、四〇五百人の生徒と接したであろうか（前橋、高崎、桐生と三地区回りました）。色々な悩み、親

にも先生にも友達にも言えない悩み、男女関係から学校の問題、進学、就職と顔が違うように一人ひとりの悩みは少しずつ異なっています。彼等、彼女等にテストとは何かを聞くと「私達に成績の順位をつける」「テストがなければ勉強しないから」の二点が一番多く、「テストの結果どのくらい理解しているのか先生や生徒が知るため」と答えた生徒は、一割にも満たなかったのです。また質問の意味すら、あるいは何でそんな質問をするのかというような顔をする生徒もいました。幼いときからテスト、テストで、テストをするのが当たり前だと思っているのです。

これから上映される映画の予告で「戦場の天使たち」というのを見ました。イギリスが舞台で、イギリスとドイツの戦いです。子供の眼から見た戦争でした。勉強、勉強で明け暮れる毎日で、空襲警報で防空壕に逃げ込み、一時期勉強が中断した喜びも束の間、防空壕で掛け算の九九の勉強です。予告編の最後に学校が空襲を受け燃え上がり、主人公の子供が「ヒットラー、ありがとう。」と空に向かって笑顔でこたえて終わりました。

このような角度から戦争をとらえた映画は私の記憶になく、改めて物の見方の勉強になりました。

だれしも子供時代に学校が嫌で（テスト、運動会、その他不得意な教科がある日など）、学校が火事で燃えてしまえばいい、学校がなくなればと思った経験はあるのではないのでしょうか。

ここでテストとは何か、私が大学の時に考えたことを書いてみましょう。

まず朝起きて何をしますか。顔を洗う、トイレに行く、歯を磨く、色々とあるでしょうが、習慣になって

いたり、生理的現象であつたりして、以外と無意識で人間は行動しています。

そんな活動の中で、鏡を見てはいませんか？私もある日、鏡を見ているうちに答えが見えたのです。何故人間は鏡を見るのでしょうか？そうです、鏡を見なければ自分の顔形が分からないからです。顔だけではありません。自分で自分の体を見て下さい、どれだけ自分の眼で自分を見ることが出来ますか？悲しいことです、自分の眼で自分自身の姿は見えません。例えば鏡を見ても、そこに映し出されている姿は反対に映った自分の虚像です。しかし、鏡に頼らなければ寝ぐせも、洋服の着方も認識できません。

そうです、テストも鏡なのです。頭の中味は見えません。テストによって頭の中味を確認することです。テストの前だといって徹夜をして暗記し、テストに向かい百点を取ることが意義があるのではありません。

ほとんどの学生はテストが終わればそれで終わりで、親もまた「勉強しなさい」が終わります。鏡を見て髪の毛が立っていたら、服が曲がっていたら、貴方はどうしますか？テストも同じです。三十点、五十点、悪いといわれる点数をとってしまった。親に怒られ、先生にもっと勉強しなさいと言われ、それではテストの本質が見えなくなってしまう。三十点を取ってしまったのではなしに、テスト内容が三割理解できたと解釈すべきで残り七割をどう対処すれば良いかまったく今の教育は怠っております。髪が立っていれば櫛で直す、服が乱れていたら直す。完璧に直すことなど出来はしないのだから（完璧とは、顔や体つきが違うのだからありえない。）、自分なりに直す。

テストは親のためにするのではなく、ましてや教師のためにするのではなく、自分自身を知るために行う

もののなのです。

テストは以上述べた他にも、何か行う前の「試してみる」という言葉にも使われております。

成績とは何か通知表とは

続いてテストを行った結果に、成績表あるいは通知表なる物が出てくる事柄を考えてみよう。この二つの関係も因果関係にある。テストをする、即ち「原因」で、「結果」として成績表、通知表を作成しなければならなくなる。

何故成績表、通知表はあるのだろうか。あんなに人を差別し、苦しめるものが存在すること自体生徒にとっても、教師にとっても、しいては親にとってもこの世の地獄である。あれは試練などというものではない、人間差別そのものです。

大人は子供に口では「お友達と仲良くしなさい。」と言ってはいるが（本当に心から思っているのかも知れないが。）、成績を上げるには、誰かを押し退けなければ上には上がれない。友達と仲良くする事と、成績を上げなさい、という言葉は反比例する言葉ではないだろうか。

世間の大人達が子供のためと勝手に言っている言葉の中には、子供達から言わせれば矛盾だらけに聞き取れる言葉も少なくないだろう。

なぜ1～5段階（場所によっては多少違うが。）で成績表をつけなければならないのでしょうか。学問は格闘技なのでしょうか。スポーツなのですか。一等、二等、三等賞、なんて順位がつけられるものなのでしょうか。また、つけていいものなのでしょうか。いいや、つけてはならないものです。なぜなら女性に向かってお前は美人、お前はまあまあ、お前はブス、と言っているのと同じように人間の差別にほかならないからである（差別については後でまとめて考えてみます。）。

私の大学の同級生で、今は北海道で教師をしているA君がいます。卒業後十年ぶりに会って色々討論したところ「お前、何で成績表は5段階をとっているか分かるか？」私は分からないと答えると、A君曰く「戦後の教育行政のなかで日本を動かす、あるいは上に立って指導する者は5%ほどの人間がいれば良いということ、成績表の『5』に相当する%が出ているのだぞ。」「エリートは5%ほどいれば充分だということなんだ。」その話が真実であれどうであれ、事実成績表といったもので人間を子供の時から、子供同志の中で差別をさせるように仕向けていることは否定できないでしょう。

それからA君はこんな事も言っていた、「テストを三十分で出来る子もいる、一時間かかる子もいる、一時間半かかる子もいる。それをなぜ四十五分、五十分と時間を区切り、テストを行わなければならないのか。」まるでテレビドラマのようである。確かにテレビの事件物は一時間で解決するが、実際に実社会においてそのようなことはありえないのです。

成績表の評価について考えてみよう。成績表はつけられる側と、つける側とある訳ですが、つけられる側

は以上述べてきたので省くとして、つける側はどうでしょうか。

成績表、通知表はつけられる側だけのものでなく、つける側の成績表であり通知表である事を見落としてはいいのでしょうか。もしも「1」だとか「2」だとかいった成績をつけた場合、それは指導者の成績でもあるのです。その指導が適切でないがためにその子が理解しえなかった、出来なかったという事ではないでしょうか。

「人間とは何か」の項でも書きましたが、私が陶芸をしていて作品の評価をするとき、もし失敗作であった時は「あれは土が良くなかった」「窯が悪かった」と言い、良く出来た時は「私の腕が良かったからだ」と言ったら出来た作品はなんて言うのでしょうか。もしも口がきけたら「勝手な事言うな！」と言って怒るでしょう。

この本を読まれている読者も思い当たることがあると思いますが、先生によってある教科が好きになったり、嫌いになったり、良く理解できたり、出来なくなったりという経験をお持ちではないでしょうか？人が人に教えるのです。当然の結果好き嫌いが生まれてきます。それによって成績も変わります。私と妻が経営している美術教室においても、一人の生徒の評価はまちまちです。

夫婦が一人の子供を巡って意見の対立をする。こんなことどここの家庭でも当たり前の事ではないでしょうか。先に生まれたというだけの先生がクラス三十〜四十名近い生徒を評価すること自体不可能なことで、それを強制している教育行政に憤りを感じます。

そして、あくまでも成績とは一方々向から見ただけの目安である事をお忘れなく。しかし、本来あくまでも目安であるべき物が、絶対的な権力を持ってしまった、あるいは持たせてしまった事が過ちの原因ではないでしょうか。

人々は何かしらの目安を立てて行動するものです。あくまでも目安とは一つの方向を示すもので、すべてを示す事などもとより不可能なことです。しかし、現実には成績表をもらった側の生徒やその父兄のとらえ方は、おおむね成績表がすべてだととらえてしまうのです。戦後四十数年。教育行政はマンネリ化を止め、自らの努力で、今日に合った目安を捜し出さないかぎりこの憤りは解決しないでしょう。

少しテーマから外れますが、視点を變えて見ると人間が人間を評価することといえ、人間が人間を裁くことにも共通してきます。神でない（ここでは敢えて神と書きました。）人間が、同じ人間を裁くのです。この事も人間社会の悲しい「因果」なのかも知れません。

憤りの次に、どうしてこんな世の中になったのか次に考えてみましょう。

今日社会問題になっている教育戦争とは

すでに前に述べた、共通一次の問題点を議題としたテレビの討論会の中で今度はゲスト側のやり取りで、東大助教授のAさん曰く「絵を描きたい、音楽をやりたいという人達がなぜ共通一次を受けなければならな

いのか。」現役の東大助教教授の発言としてはおもしろかった（おもしろいとは、少々皮肉を込めて）。Aさんの発言に対してBさん（東大卒で現在評論家）曰く「たとえアーティストであっても常識を知らなければ世界に共通しない。」と反論し、二人はOBと現役で激論をした。その他たくさんの大学人、塾経営者、大学生の出席で4・5時間の討論会を朝まで行っていた。

そして二月。共通一次が終わり、深夜のテレビは今度は各国公立大学の分析を放映している。六百点前後の数字が北は北海道から南は沖縄の大学まで順番に並んでいる。

それらを解説している各企業（有名と言われている塾、予備校）の、先生と言われる人々が得意満面（策みを浮かべて）でテレビカメラに向かって解説をする。たぶん受験生及びその母親あたりもそれらの解説を見ているのだろう。

ここで一つ疑問を持って見て下さい。国公立大学の分析をなぜ国や県あるいは市の責任において、また、各大学が解説をしないのか。なぜ企業が分析をするのか。私大なら話が分かります。

その後テレビのニュースには、各企業体の大学受験に関連するニュースが流された。

あっせん

まず幾つかあげてみよう。都内の各ホテル、旅館、受験のための施設の紹介。その施設幹旋の旅行業者の紹介。たまげた事に航空会社も受験生のために運賃2割り引きという紹介。ここで私の店のアルバイトの学生（北海道出身。女子。）に聞いてみると「私も母と飛行機で受験にきました。今考えると、お金が幾らかろうと、大して気にもとめませんでした。今度自分で旅行などしようかと考えると、少しでも安くと考え

るのに、受験のときは考えないものですな。」ということだ。

以上テレビでの討論会、共通一次の分析を行っている企業、受験に群がる一般企業。それらを暗黙のうちに肯定している教育行政。このように考えていくと、もう救いようのない教育戦争であり、教育とは程遠い教育地獄そのものではないでしょうか。その地獄の亡者達が狙っているのは、外ならないなんの抵抗もできない子供達なのです。

ここではっきりと見えてくるのは、今の教育機関のでたらめさ。人々は「社会が悪い」「今の教育は、間違っている」「政治が悪い」「一流企業が良い大学から採用するから悪いのだ」と漠然と批判されるだけで一向に教育地獄から抜け出られない。

一番悪いのは、日本中に存在する大学、大学人が癌細胞なのである。付け加えて言うならば、国公立の大学は最悪である。

なぜ大学人が癌細胞なのか考えてみよう。ここでジョン・F・ケネディー氏に登場してもらおう。アメリカ合衆国第三十五代の大統領である。私が中学生の時だったと思うが、ケネディー氏が暗殺されたことをテレビで見えてショックを受けた記憶があります。そのショックは何であったのか定かではありませんが、今もおケネディーは私の心に生きているし、アメリカ国民の心のなかに存在しているでしょう。ここで述べたことは、ケネディーの大統領としてのことがらではなく、ケネディーを産み出した大学を考えてみよう。

ケネディーは、ロンドン大学、ハーバード大学に学んだ。何年か前NHKの番組で世界の教育について何

週間にわたって放映された。その中でハーバード大学が登場し、学長だったか、学務主任だか定かではないのだが、ハーバード大学の在り方、採用について述べておられた。

その一例をあげてみます。「ここに登場する女の子は高校時代優秀な成績です。」テレビの画面には成績表（高校からの内申書）が出て、日本式に言えばオール５みたいなもので「この子は採用しませんでした。なぜならこの生徒は、高校時代倶楽部活動もせず、高校に通うのに両親に送り迎えしてもらい、アルバイトもしない。このような生徒は、うちの大学は求めています。うちの大学は物理学者を育てるところではありません。うちの大学は政治家、アーティストを育てるところです。」そして彼曰く、ケネディーやそれ以外の幾人かの有名人物をあげたのでした。そして採用の仕方といったら、面接重視です。

面接も大学の各地区のOBの担当者が当たり、各高校に出向いてハーバードを希望する生徒と会い、担任に会い、生徒からは大学に入って何をしたいか面接をし、抱負を聞き、その評価を大学に提出する。そのような光景が放映されました。つけ加えて担当官は「一回のペーパーテストでその子の将来を見通す事は不可能。」そして、又ケネディー氏についても「彼の成績は、高校時代は中ぐらいであったが、何か光るものをもっていた。」と締め括ったと記憶しております。

塾産業が乱立する日本において、またそれを食い物にする一般企業のまかりとおる日本において、全く未来を無視し、今が良ければ良いというやり方に私は憤りさえ感じます。

ケネディー氏が出てきたところで、彼の言葉を述べておきましょう。

大統領就任の言葉。一九六一年一月。その日、ワシントンの町は足もとが凍るほど寒かった。人々はコートに身体を包み、新しい大統領が現れるのを待っていた。

大統領はゆっくり歩いて来た。この寒さにコートなしで、帽子もかぶっていない。それはまさに新しいアメリカを思わせるような、すがすがしさだった。

彼は静かに、力強くアメリカ国民によびかけた。

「みなさん、国があなたのために何をしてくれるかと問わないでほしい。それよりも、あなたが何をすればこの国がもっとよくなるかを考えようではありませんか。……………」

演説が終わっても、立ち去ろうという人は一人もいなかった。只、嵐のような拍手の音だけが、1月の空にいつまでもこだましていた。

このとき、ケネディは四十三歳。アメリカの歴史始まって以来の若い大統領だった。

もうケネディの演説を聞いたアメリカ国民が何故嵐のような拍手をしたかは、書かなくともおわかりでしょう。しかしあえてここで補足するなら、ケネディの演説を聞いて、今の日本人なら「国があなたのために何をしてくれるかと問わないでほしい。それよりも、あなたが何をすればこの国がもっとよくなるかを……………」と聞けば怒り出すかも知れませんか。「国が我々のために何もしないのなら、それは税金泥棒だ。」とでも言うかも知れません。しかし良く考えてみてください。日本は自由主義国家なのです。社会主義国家ではありません。国が悪いのなら、社会が悪いのなら、それはすべて国民が悪いのです。それが自由主義国

家なのです。前にも述べたように、ここで自由とは何か、もう一度かんがえてみてください。

自由を主張、唱える国アメリカの大学のあり方。大学人の人間性の一端をかいま見て強く感じることは、いつから日本の大学人は癌細胞となり果てたのか。「良い大学とは」、「良い高校とは」、「良い中学とは」、「良い小学校とは」、「良い幼稚園とは」。良いとは建物が良いのか、設備が良いのか、ブランド志向で名前が売れているからか、良い人材がいるからか、何をさして言うのか。

東大に入学すると建物や設備が教育してくれるのか。建物といえば、最近の小、中、高、大と鉄筋コンクリート建ての立派な校舎が立ち並ぶ。私が陶芸の指導で小、中学校に行ってみると、「つめたい」空しさを感じる校舎ばかりである。私はインテリア・デザイナーを職業にしていたから余計に感じるのかもしれない。血のかような人間の教育の場ではありません。大きなコンクリートの塊の中で、少数の先生と生徒達。建物は立派でも資材は予算がないといって、ほとんどそろっていない。先生の人数も、専門の先生は皆無に等しい。知識を詰め込むのなら、あれで良いのかなとさえ思えてくる。私達の小学校の頃は木造机も椅子も陶芸の窯も手作りでした。

校舎に金をかけなくとも教育は出来ます。バラックでもたくさんの先生、たくさんの器材、何も教育大学を出て教職をとった人でなくても現社会においてすばらしい業績をあげている方々に教育に参加していただければ良いことです。そのような中に地域の教育（学問）あるいは、伝統が引き継がれて行くのではないのでしょうか。けっして教育は鉄筋コンクリートの建物があるわけではありません。人間教育は、人間が行うもの

です。絶対でない人間が、絶対でない人間を教育する。しかしこれが本当の姿であろう。

今日の学校教育の現場にコンピュータが介入しだし、コンピュータで授業を行いだしている所さえある。そのうち教員もいらなくなるのか。ある生徒曰く「なまじ下手な先生に授業を習うのなら、テレビの教育講座の方が良く分かる。」

教師は、コンピュータで生徒の成績を管理する。その教師は教頭、校長に管理され。教頭、校長さえも教育委員会に管理され。教育委員会も、教育行政に管理され。行政もコンピュータに管理される。確率と統計に支配され人間がものごとの善悪を考えなくても、機械が行う時代が目の前に来ている。「人間が確率や統計で判断されてたまるか。」と私は叫びたいところです。

大学人も同じように、人であって人でなくなりつつある。共通一次をコンピュータが分析し、共通二次の参考にする。ここでもう一度大学とは何か考えていただきたい。

便利だからといって、コンピュータが採点できる試験問題を、日本中に共通一次という名のもとで行い、その結果、大学が採用の基準にする。それが真の大学人のすることなのでしょう。大学とは、すべての国民のお手本となるべき学識経験者の集まる場所ではなかったのでしょうか。その学識経験者（名誉職）を、放棄して給料をもらうサラリーマンになりさがった現実是否定できないでしょう。反論があるなら述べていただきたいものです。

そのサラリーマン大学人に習った学生が、教育者として小学校、中学校、高校の教師になって行きます。

各学校の教師達もサラリーマン教師になるのは当然のことです。

同じようにまた、一流大学（？）を卒業し一流企業と呼ばれる会社に入社する。そしてまた、官僚の道へと進む。これでは人の心の痛みなど理解できる社会や国家など生まれてくるはずありません。

現在のペーパーテスト方式をやめなにかぎり、教育（社会）は、良くはなりません。毎年共通一次のやり方をいじってみても、根本的に間違ったことを押し進めるかぎり、癌細胞は生き続けるのです。今の医学は癌に対して二つの意見があります。一つは、癌がそれ以上広がらないようにする方法と、もう一つは根本的に手術で取る方法です。戦後四十年間の間に広がった癌細胞はもう押さえているだけでは、押さえきれない所まで来ているのではないでしょうか。大手術をすることは患者にとって大きな不安を与えますが、しなければいずれ癌に汚染され、死を待つしかなくなるのです。

またハーバード大学のように、大学自身、大学人みずから努力し癌細胞と戦わなければ、全身に癌細胞が回り、おのずと破滅の道に進むことは避けられないでしょうし、いくら医者が優秀でも、どんなに設備が整っていても、患者自身が努力しないかぎり病気は治りません。

ペーパーテストは教師にとって非常に便利な道具です。採点が楽なのです。答えをあらかじめ決めて、その答えを書かなければ「×」をつけられるからです。「×」とは間違っているという意味なのです。本当にそうなのだろうか考えてみましょう。私の父の時代に習った漢字、私の習った漢字、今の子供達の習っている漢字、同じ漢字の書き方が変わってくる。テストでは、今の漢字を書かなければ「×」である。そんなこ

とを要求するテストは二十年前流行った言葉を借りると「ナンセンス」その一言に尽きる。現実には私たちが生きている社会では、意味のない事を意味ありげにしているだけのことがあります。

ここで一つ例を挙げて考えてみましょう。お読みいただいている貴方への質問です。「こい」と言う漢字を書いてみてください。池の鯉では有りません。人を「こい」する方の「こい」です。そうです直ぐに書けると思いますが、今日使われている「こい」という漢字は「恋」と書くこと決められております。しかし元の漢字で恋という字を書ける人はそれ程沢山の人はおられないでしょう。昔の漢字は『戀』と書いたのです。

よく漢字の構成を御覧になってください。真ん中に『言』という字その下に『心』という字があり、二つ合わせて「心の言葉」という意味になります。そして左右にある字が『糸』という漢字です。すなわち「心の言葉を糸で結ぶ」のが『戀』なのです。なにも『戀』という漢字だけではありません。すべての漢字そのものに意味が読み取れるように作られているのです。漢字や言葉とは一日や二日で出来たものではありません。それなりの生まれてくる原因があるがゆえに生まれてきたのです。「子ども達に漢字を教えるのに昔の字では難しすぎる。もっと簡単な字にすればいい」学者の勝手な解釈に依って漢字を次々と漢字でない漢字即ち単なる記号として扱ってきて、学校で先生が、子供達に「漢字のテストをする」とは、何を目的として、行うのでしょうか？テストで恋という漢字を『戀』と書けば「×」になるでしょう。教えるほう採点するほうは楽でしょうが、される側は何にも理解出来ないままただ単に恋という漢字、いや記号が書けるか否かをテストすることが国語という教科のなかにある漢字のテストなのでしょうか？漢字の書き順が違うのだ、跳ね

ているだのいないだの、やたらと技術的な所のみに採点基準を置き肝心な漢字の持つ意味など何処かに置き忘れてきた今日の教育は何も以上あげたほんの一例の漢字のみならずすべての教科にも及んでいるのです。

もう一つ付け加えておきましょう。漢字の採点で、やたらと技術的な所のみ採点基準を置くと書きましたが、体育の教科などは典型的な技術に採点基準を置いています。鉄棒の懸垂けんすいが出来る人は偉い人でしょうか？出来ない人は駄目な人ですか？その他数多くの事柄が、出来る出来ないで成績が付くのです。人間『スーパーマン』ではありません。スーパーマンにさえ弱点はあるのです。この辺りで元に戻して行きます。

外国（英語圏）で生活し、高校を出た日本人が、日本の大学を受験するのに二、三カ月早く帰国し、英語の勉強を塾で習わなければ大學に入学できないという。まったくもって目茶苦茶な教育をし、何が、どこが、世界のなかの日本人なのか分わりません。

しかし、受け入れる側も努力を要する場合があります。すなわち、論文となると読まなくてはなりません。読み取らなくてはならないのです。書く方も読む方も努力を必要とします。面接も同様に判定を下す能力を要求されます。そんな中でお互いが、受ける方も受け入れる方も努力を必要として、人間的に高められて行くのではないだろうか。

しかしここで一番困った事は、今の現実の矛盾点に「気がつかない」あるいは、今の方法は「しょうがない」と思い込んでいる人々が多すぎるということです。

このところ毎日のように大韓航空機爆破事件の犯人の一人「金賢姫」の北朝鮮での教育が報道されました

が、テロ行為についても命令者に絶対服従で、なんの疑問も持たずに実行する。ましてやテロ行為を誇りにさえ思う。日本にもそういった歴史がありました。形は変わっても、今の教育の中に現実には生きているのです。ある塾で一人の生徒が休んで、ある生徒曰く「彼が休んでよかった。」そんなことを言ったら「彼が死んでくれれば一番上がる。」とでも言いたいのかと思います。でもここで良く考えていただきたい、その塾の子供が悪いわけではないのです。彼を教育した日本の社会が彼にそう言わせているのです。

教育と学問（自問自答）は違います。教育は一步間違えれば人間を洗脳する道具となります。人間同志殺し合っても罪の意識を持たなくなってしまう。自分に問うことを行えば、共通一次で六百点、七百点など取れなくなってくるでしょう。それだけの点数をとるのには、自分を洗脳し機械（コンピュータ的）により近づけなければとれるものではありません。人間的感情など邪魔なのです。前にも述べましたが、そういった人間が各大学から毎年学校の教師へ、企業へ、官僚へと送り込まれて行く。癌の元を断たなくては どうにもならない。生産的努力でなしに、人間的回復をしないかぎり今の日本は、将来の展望は、真っ暗闇である。

だいぶ長くなってきましたが、ここで学問とは何かの答えを二つの例をあげて答えとしましょう。

『学問というものは、事件が起こってから後の説明には役立つが、これから起こることについてはあまり役立たない。今回の三原山噴火事件で、あれだけの専門家が集まっても予知については役に立たなかったことを見ても、諸君はおわかりのことと思う。筆者は戦前、名天文台長の藤原咲平さんと親しくしていた。この方の予報はなかなかよく当たった。今日でも天気予報は当たらない場合がたくさんある。すると予報官は

もっと予報設備を充実すれば当たらないことはない、とおっしゃる。藤原さんの時代にはまだコンピュータもない時代であったが、その不完全な設備であったにもかかわらずよく当たった。それは学問以外に長年の経験で身につけた勘の働くと、その勘から出てくる決断の速さであったようだ。天気予報も時間を争う仕事であるから決断の速さが必要であることは三原山と同じことである。』

『これは莊子という本にある中国の話で、中国の春秋戦国時代・西暦270年頃に活躍した五覇諸公の一人の桓公の話である。この桓公が城の楼上である日読書していた。すると、当時の城といっても規模が小さいので、その門前に住っていた車大工の親爺が城を見上げて「殿様、一寸うかがいますが、ただ今読んでおられるのは、どういう方のお話ですか。」と問いかけて来た。桓公は気安く「これは聖人の言葉だ。」と答えると親爺は「その聖人という方はまだ生きていますか。」。桓公「いやもう死んでしまった。」。親爺「おやおや、それでは殿様のお読みになっているのは、その亡くなった方の糟みたいなものですね。」。桓公の聖人と言ったのは孔子であつたらしいので、桓公はムツとしたらしく「乃公は聖人の書を読んでいるのだ。お前の如き車大工の分際でこれ言うのは無礼であろう。もしお前の申し分に理屈があるならばよし、もし申し開きが出来なければ早速お前は打ち首だ。」と怒り出した。すると親爺は「ご尤もです。その申し開きは私の経験から申し上げることにしましょう。車大工の仕事で車輪に軸をはめる穴を切る仕事は、少し大きめにすれば心棒がゆるくなります。さりとて小さく切れば心棒は入りません。大きからず、小さからずという呼吸は自然に手馴れて知らず知らずの間に会得することです。これを口で言うわけにもいきませ

ん。勿論文字に書くわけにもいきません。全く心伝心の呼吸と申すもので、多く手がける間に自然と悟ることです。これを私の息子に教えることも出来ませんし、また息子も受けようもありませんので、仕方なくこの七十歳の今日まで車大工の名人といわれながら仕事をつづけております。その聖人とかいう方も本当の大切なところは伝えられずに死んだのでしょね。ですから殿様のお読みになっているのは聖人の糟だと申し上げたのです。」と言ったのには流石の桓公も一言もなかったとの話である。この話は勘とかコツという世界の話で、頭で知るといふ学問のほかに体で知るといふことを必要とする仕事に全部付随する問題である。文字なり数字なりによってある程度具体的に整理できるが、それは新聞を読むのと同じ程度のことです。少しも自分の骨身になっていない。体験の集積は数字として表現できないが、何か事件にぶつくと威力を発揮するのである。』

以上二つの話は、江戸千家の茶道「孤峰」昭和62年3月号茶道評論家、絵守花外亭氏の御言葉をお借りした。長々と書いてはきたが、ここで言いたいことは「人間とは何か」の項で締めくくりに書いた「反省、感謝、実行」の三つの文字の一つ、実行こそ生きた学問なのである。

また「今日社会問題になっている教育戦争とは」の結論としては、「戦争」という言葉を少し考えてみて結論とします。地球の歴史は戦争の歴史かもしれません。この事は「人間とは何か」でも触れましたが、人間同士殺し合う戦争、悪い事と誰も知っている戦争。なぜ地球上から姿を消さないのでしょうか。戦争の結果は必ず悲劇の結果ばかりではないからです。必ずその影で喜んでいる存在があるからです。

教育戦争も同じです。戦争の兵隊として子供達あるいは家庭までも巻き込み殺し合いをさせて喜んでいる存在があるのです。

教育戦争、戦争とは必ず死傷者が出るものです。私はこの教育戦争の犠牲者の数の裏付けになるような資料はいにく持ち合わせておりませんが、年間を通して相当の子ども達が死傷しているはずです。『敵と戦って死ぬもの、敵を殺すもの、何とか戦いを回避して和睦わはくできるもの。』私はここで敢えて『敵』の固有名詞はここに記載することは避けます（非常に抽象的な言葉なので、少々注釈を付けて置きます。「敵と戦って死ぬもの」つまり、子ども達の自殺を指しています。）。

続いてもう少し戦争なる事柄で、交通戦争を取り上げて考えてみます。

まず始めに太平洋戦争。一九四一年から四五年にわたった戦争。日本での当時の呼称は大東亜戦争。この戦争の死者は軍人約一十万人、市民一十万人の死という結果である。ちなみに一八九四年から九五年の一年間の日清戦争などでは、一万七、〇〇〇人の犠牲者であった。なぜくどくどと過去の戦争の犠牲者の数を述べているかと言え、次に挙げる交通戦争の死傷者数、昨年昭和六十二年度の数字と比較して戴きたいために例を挙げたのです。

六十二年度の交通事故による死者は九、三四七名、傷者は七二万二、一七九名、死傷者合計は、七三万一、五二六名という膨大な数字を過去の戦争の死者と比較してみてください。

私の言いたいことは、人と人が殺しあう戦争も、交通事故で死ぬことも、教育戦争で自殺する子供達も、

社会戦争のなかで自殺する大人達も、『死』という事柄は全く同じ事なのです。ただ死に方、方法論が違っているだけで誰しも死を歓迎して死んで行ったわけではないことだけは、確かだと思います。

日本と諸外国が戦争をし、毎年一万人もの人が戦死し、七〇万人もの傷者が出ていたら国民、世論は何と叫ぶでしょうか？

すべての公害に付いても文明生活を営もうとする人間の一人一人のエゴから生まれてきているのです。

話は多少それるかも知れませんが、「天敵」という言葉を考えてみましょう。

地球上に存在する生物すべてに天敵が存在してきます。ある意味においてはそれらが、自然の摂理せうりと呼ばれるのでしょうか。弱肉強食も又天敵なのかも知れません。人間の天敵は何なんでしょうか？戦前においては人間が人間を殺しあう、即ち人間の天敵は人間その物だったが、今日の情勢を垣間見るに、今日の人間の天敵は人間の産み出した、機械文明なのかも知れません。

私達は戦争のない国を願っておりますが、願っているだけでは現実には進展は見られないことを述べてこの項の結びとします。

生涯教育について



最近よく新聞などが出る記事に生涯教育、老人大学などが載っています。そして、何処何処の公民館で何をする。あるいは大学で何をする、というカリキュラムが載っており参加者を募集したりしています。

私は、学校を出てからが本当の勉強だと思っているし、人間は死ぬまでが勉強の期間だと思っているので、決して生涯教育や老人大学は悪いとは思いませんが、どうも内容の点で疑問が多すぎます。

ちょっと視点を変えてみてみましょう。老人のスポーツといったら何でしょう。まず一番に挙げられるのがゲートボールではないでしょうか。あれはスポーツでしょうか。確かにスポーツの中には勝った、負けたと、格闘技のようなスポーツもありますが、本来スポーツの意味は日本を含めて世界のスポーツは、オリンピックや世界選手権などを目標に高度な技術水準を追求するエリート・スポーツ（選手スポーツ）、健康体力づくりやレクリエーションのためのスポーツ・フォー・オール（市民スポーツ）とに二極化し、ゲートボールは後者の市民スポーツにはいる分野です。ここで市民スポーツの定義を書こうというわけではありません。ゲートボールのルールが問題なのです。「他のチームのボールを不利な位置に進める」ここが問題なのです。ゴルフと少し比較してみましょう。ゴルフのルールは人生訓そのもののようなスポーツで、自分との戦いです。ゲートボールとは相手を犠牲にして自分の立場を有利にするゲームです。年をとってまで相手を傷つけるゲームとは何なのでしょうか。ゲートボールの下手な老人は仲間にもいれてもらえない。また老人ホームで金持ちの老人がえびり、その老人に取り巻きがゴマをする。そんな話を耳にする度に生涯教育だの老人大学だのと綺麗事ばかり言う官僚的発想に呆れて物が言えません。老人社会にもいじめがあるし、落ち

こばれもあるのです。

国はそういったことを無視し、今度は老人を諸外国に輸出することを考えました。輸出とは言葉が悪いかも知れませんが、事実なのですから仕方ありません。円高で老後は外国で、というキャッチフレーズが気に入らないのです。こんな事を考えつく国の政策とは、エリート大学を出て官僚になった人間によって方向づけられているのです。私は間もなく四十代になろうとしてますが、とてもじゃあないが、そんな考えについて行けません。老人社会は真つ暗闇です。何故技術論ばかりを考えるのか、もっともって人間性を考えないのか。学問のところで述べましたが、莊子の本の中に出てくる老人の言葉「七十歳になっても仕事を続ける」、妻の祖父が残してくれた言葉「反省、感謝、実行」人間死ぬまで働くことに意義が見出せるのではないのでしょうか。ここでいう働くとは、何もお金を稼ぐという意味ではありません。仕事を持つこと、事に仕える事なのです。しかしそれは大変難しいことです。なぜなら二つの問題点があるからです。その一つ、お年寄りの考え方の中に必ず「今の若い者は……」この言葉がかならず出てきます。またお年寄りに限らず年上者が年下に対してよく使う言葉です。この言葉は何もいまさら新しく出てきた言葉ではありません。いつの時代から使われたのか、多分大昔から延々と使われてきたのでしょう。そして若い者はその言葉を聞く度にいやーな気分になり「うるさい、時代が違うよ」と言い続けてきたのではないのでしょうか。続いてもう一つ、お年寄りの言葉で「この年になってまで働かなくても良いだろう」という、仕事を放棄してしまった言葉です。何事も放棄してしまった人間に、何を言っても無駄なことなのです。自分自身が自覚を持って行わな

いかぎり。以上の二点が生涯教育を大きく疎外している原因かと思っています。

お年寄は先生です。先に生まれた人なのです。何か余計に経験、体験をしているのです。それを後世に伝える義務、仕事があるはずなのです。これまた前にも述べましたが、例え年下といえども小学生からでさえも学ぶことはあるのです。人間社会で上下の関係、方法論で片付けようとする所にもこの老人社会の問題が解決できない理由があるのではないのでしょうか。

老人はうるさいから老人ホームへ、外国へ、ゲートボールをさせておけ。こんな考えが生まれて来るのです。今、若いと思っている人達でさえすぐに老人の仲間入りをするので。そして死ぬのです。これが因果（原因と結果）で、人間、地球上すべての摂理なのです。

私が述べたいことが理解できるなら、自ずと答えも見えてくるはずです。

我が祖国日本において、数々の伝統文化が生まれ、若い者と年老いた者の対立のために次々とすばらしい技術、物の見方が消えて行きました。これからますます消えて行くでしょう。生涯教育の何たるかを理解実行しないかぎり……。付け加えておきますが、私の言いたい事は、決してすべて昔はよかったなどと言っているわけではありません。お年寄りの言うことがすべて正しいなどと述べているわけではないです。また若い人々が正しいとも言っていません。昔とは歴史、時間の流れ、歴史的事実なのです。事実の解釈の仕方は色々学問的にあるでしょうが、真理は一つなのです。いかに時間の流れを生きるか、真理を見つけるために。年齢は本来関係がないのです。子どもでさえも沢山の経験、苦難を乗り越えてくれば、ただ単に年を重

ねて来た人間よりはるかに大人です。

ここでまとめてみると、老人は、若者に自分の考えを押しつけるのではなしに、経験を語り、語っただけでなく実行する。若者はまた、それらを自分のものとするように実行する。そして新しいやり方が生まれ、老人もとり入れる。お互いに尊重さえすれば生涯学習の方法が必ずや見えてくるはずです。今日の新聞に、どこどこの老人会に大学の先生が講演し、真剣に皆さんが聞いているという記事と写真が載っていましたが、全く無意味で時間の浪費です（ちょっと飛躍したかも知れませんが）。講義を聞いて良くなるなら非行も犯罪も生まれません。

老人の方々にお願いしたいことは、自分より若い教授から講義など聞くのでなしに、今まで生きてきた証をどのようにしたら社会に残して行けるのか一人一人が考え、自分は何が出来るのか、何をすれば良いかを考え実行することが死ぬまでの仕事ではないでしょうか。この生涯教育に関していくつかの、私としての方法論はありますが書くことは差し控えたいと思います。なぜなら、ここで一方的に述べることは先程書いた教授が講義をしている事となんら代わりがないからです。どんなに時代が変わろうと人が生まれ、年老いて死んで行く。この事は変わらぬ真理なのです。

ここで一言、ご年配の方で私のお店にくるお客さん（男性）の言葉を載せておきましょう。「マスター聞িয়েくれるかね。私はこの年になるまで、子どものため、家庭のため、家のローンを払うため、がむしゃらに働いてきました。気がつく子ども達は一人前になり、家のローンも終わり、会社も定年になり、今は子

どもが始めたコンピュータとやらのお店の留守番をしています。毎日お茶汲みくをしていて、私の人生ってなんだっただろうとつくづく考えさせられる時があります。そんな時何かができればいいなと思うのですが。」

このような人は一人や二人でしょうか。明治、大正、昭和、この三つの時代は、ある意味において戦争の歴史です。今日もまた国と国とで殺し合いをする戦争ではないにしろ交通戦争、教育戦争、いつまでたっても戦争戦争で明け暮れています。当然すべての人間がついて行けるはずなどありません。このような歪みゆががいたる所で出てきている現実。その歪みに拍車をかける今の社会。老人社会が抱えている問題は、いずれ、あるいは、まじかに年老いる我々の問題でもあるのです。

ちよつとひと休み



この本をお読みになつてゐる貴方も数々出てくる道標に少々お疲れでしょう。標識を立ててゐる私も平らな道ばかりではないので少々疲れが見え始めました。もう峠は越えて下る道程に入つてきたので、ここらでドライブインにでも寄つてお茶でもと考えたのですが、現実に貴方にお茶を差し出す訳には參らないのが誠に残念です。現代はサービス過剰でハイテクの時代といわれますが、本の中の私がお茶をお入れすることは出来ません。仕方がないのでお茶は貴方が自分で入れて下さい。出来ましたらついでにお茶菓子なども用意すると良いでしょう。

お茶が入ったら、少し真面目で碎けた話を聞いてください。

私のお店に来てゐるアルバイトの大学生諸君（すべて群大の医療短大の女子生徒で、現役・OB含めて五名）にすばらしい卒論のテーマを教えてあげるのですが、どういう訳か誰も見向きもしません。それどころか顔を赤くして嫌がるのです。

なぜなのか皆さんも一緒に考えてください。そんなにくだらないテーマとは、私は思わないのですが。

『自分のした屁は臭くても我慢できるが、他人のした屁は我慢できないほど臭いのはなぜか？』

私は真面目に学生にすすめるのですが、学生達はなぜか真面目にとらうとはしません。なぜでしょう？私は医療にたずさわる彼女達だからこそうのです。

「トイレで用をたし自分の排泄物においては気にならないのに、他人（愛する人も含めて）の用をたしたあとに入ると我慢できなく、窓を全開にするほど堪えられないのはなぜでしょう？」いつも不思議に思いま

す。貴方はどうですか？疑問が出たら説明する。すなわち立派な卒論のテーマと思うのですが、いかがなものでしょう。

この本をお読みになっている貴方も、真面目に研究なされると、ひょっとして利根川さんのようにノーベル賞に輝けるかも知れませんよ。

立派な人間の嗅覚についての論文となるでしょう。

さて、休憩は終わりました。また歩き始めたいと思います。頑張って一緒に歩き始めましょう。

日本から天才は生まれない



生涯教育で老人問題に問題提起をしましたが、次に天才がなぜ日本から生まれてこないのか少し考えてみましょう。その前に天才と秀才の違いを少し書いておきます。まずある子供が父親に聞きました。「お父さんエジソンで天才か秀才か知っています？」お父さんは答えに困ったそうです。子ども曰く「エジソンは秀才だよ。」（父親は天才だと思っていた）「エジソンは一つのことを造るのに何千回、何万回の実験をして一つのものを造った。」けれども「天才はすぐにできるんだ。」と答えたそうです。（子供は当日学校で先生から教わった話を父親にした。）

エジソンを御存知の方ならこんな話は御存知でしょうが、エジソンが小学生のとき、あまりにも出来の悪い子だということを聞いた母親が、それなら結構、私が教育しますといって学校をやめさせたのです。エジソンの母は学校の先生でした。辞書によると天才とは「生まれながらもっているすぐれた才能」、秀才とは「学問や才能のすぐれた人」と載っています。

なぜ現在の日本から天才は生まれないのか。一言で言ってしまうえば、画一化された社会だからなのですが、もう少し具体的に考えてみましょう。小学生がいきなり大学に入学したことがあったでしょうか？そしてまた日本の大学で二十代の教授が誕生していますか？

外国の話で恐縮ですが、天才児と言われる子どもの話を時々耳にします。日本においては「天才児あらわる！」などと聞いたことは余りありません。時々スポーツの世界で紹介されることはありますが、なぜ天才は生まれないのでしょうか？

いや、天才は次々と生まれております。しかし今の日本においては天才は片輪・奇形児扱いされて、教育の名のもとに矯正きようせいされてしまうのです。天才が世に出る機会があるとすれば、せいぜいそれはテレビの世界です。どんな番組かと言えば、奇人変人コーナーでしょう。

確かに天才と思える人は一般人と違って見えるかも知れませんが、奇人変人ではありません。物の見方、考え方、実行の仕方がある部分でとても鋭いのです。

私どもの美術教室に通う生徒達のなかにもたくさんの方がおります。その中で特に気のついた例を挙げてみましょう。ある六歳の男の子の話です。なぜ園児と書かないかというと彼は幼稚園に通っていないのです。埼玉県のある幼稚園に通っていたそうですが、幼稚園で先生からも友達からも相当いじめられたようにしました。なぜいじめられたかを書く前に、なぜ私が彼を天才と感じたかを書いておきましょう。

先に述べたように天才とは物の見方、考え方、実行の仕方がある部分でとても鋭いのです。彼の場合は考え方が鋭いのです。例えば彼がこんな話をしてくれました。「先生、僕は叔父さんがきらいだ。だって叔父さんはいつも僕をここに送ってくる時に、車の中で『おまえ、絵なんか習ったってお金になんかならないぞ。』って言うんだもの。叔父さんてばかだね。僕が絵を習っているのは、自分のためだもの。」と言うのです。その叔父さんより六歳の子どもの方がはるかに物事の道理を理解しているのです。

ここに彼を紹介するために、お母さんから幼稚園時代のことをおおよそ聞いてみました。幼稚園では先生に相当異端児扱いされたようです。確かに動作は他の子とくらべ遅いように見受けられますが、観察力が鋭

いたため考える時間がかかるのです。先生には邪魔者扱い、友達には殴る蹴るの乱暴を受けたようです。せっかく描いた絵を先生に破かれたとか、実際私も子供達を指導しているわけですが信じられない話です。彼が傷だらけで帰って来るので、お母さんはなんとかいじめをなくすように幼稚園に頼みに行ったそうです。先生は「いじめられる方が悪い、殴られれば殴り返すぐらいでなければ駄目だ。」また「お宅の子は子どもらしさがなく生意気を言い過ぎる。」。こんな事もあったそうです。読み書きのテストをしたら全然出来なかった。そこでお母さんが先生に呼ばれ「お宅の子どもは読み書きができない。家庭で教えているのか。」お母さんの話では「そういったものは詰め込むのではなく、ひとりりで覚えていくものだと思います、詰め込み教育はしなかった。」と私に語ってくれました。そこで私は彼の知能指数は多分かなり高いはずだがと話したところ、読み書きのテストは出来なかったけれど、図形のようなものはかなり良かったようでした。そしてまた、彼はお母さんに読み書きを教えてほしいと言ったそうです。結果はおわかりでしょう。すぐに覚えたそうです。また、お母さんはこんな事も話してくれました。いじめの問題で彼に「ぶたれたら、ぶたれっぱなしでいい、ぶちかえしなさい。」と言ったら、彼は「ぶたれたり、蹴られたりするってとても痛いね。ぶち返せばきつと相手もいたいだろうし、僕けんかは嫌いだ。」と言ったそうです。幼稚園でお絵かきのある日は行きたくないと言っていたそうです。彼がうちの教室に通い始めてもう半年になりました。とってもしっかりした絵を描き、子どもらしさ、夢のある絵を描いてくれています。

彼は天才なのです。私の心配は、そしてまたお母さんの心配も小学校に入学してからの彼の行く末です。

指導者（先生）いかんでまた幼稚園の二の舞をさせたくない。これが本心です。しかし、今の教育行政によって矯正されることは目に見えています。一人の先生が前にも述べたように三十〜四十人も受け持つのです。画一化した教育（文部省の指導要領）に則って教育を進めなければならない現場の先生を一方的に責めるわけにはいかないでしょう。

ここで、この項を書き終わってから一つの結果が出たので、追伸を述べておきます。

天才少年のこととお母さんに色々尋ねてみました、と述べましたがその中で幼稚園の指導方法に催眠治療を受けたという話を聞き、私はとても心配になり群大の精神科に行くようにすすめました。早速次の日行ってきたそうで、その結果の報告を聞いてまずは一安心しました。結果を簡単に述べてみましょう。精神科の先生に色々な機械でテストをして戴いた結果「催眠治療の悪影響はないでしょう。」という結果。続いて、「この子の知能指数は大変高く、中学生ぐらいの判断力を持っている。早くも反抗期に似た症状が出てくるのはその為です。よかったら知能テストを受けさせますか？」お母さんは子どもが疲れているみたいなのでお断わりしたそうです。機械に出てきた波長でかなり高いIQの数値が出ていたようです。先生の診断も、「この子がこれから入学するのに適した小学校は日本にはないでしょう。」私の述べた意見と同様にお医者様は「小学校の三年ぐらいまでいじめられるかも知れませんが、四年生ぐらいから自分をコントロールし始めて自分の才能を押し込めるようになればいじめもなくなるでしょう。」という結果です。お読みになっている貴方は、どのように考え実行したらよいと思いますか？

途中で追伸をはさんでしまいましたので、話をもとに戻します。

今は消えてしまった言葉かも知れませんが、教師とは聖職ではなかったでしょうか。

話が天才から教師論に走ってしまって恐縮ですが、もう少し書いてみたいと思います。私も大学時代教師に憧れ、教職課程（中学、高校）をとったわけです。現実のあの時代は、高度成長の時代です。公務員の給料より民間の給料ボーナスは遥かに上でした。極端に言うと倍ぐらい違ったのです。そこで私は建築デザイナーの仕事に入ったわけですが、二、三年後に第一時オイルショックが来たのです。

今からかれこれ十三、十四年も前になりますが、今、流行の言葉を借りればトラバリュを思いつき教師になろうと考え、大学の恩師（43A305私の学籍番号担任であった田井先生）に相談したところ、「江原よく考えてくれ、教師は春休み、夏休み、冬休み、休みが多い。公務員だから生活が安定する。そんな考えがあるならなるな。相手は生きている子供達なんだぞ。」と言われたとき、はっと、ある先生の顔がうかんだのです。色彩学の豊田先生です。この先生は教職実習にあたり生徒がお世話になる学校を日本全国回っておられました。私も妻も群馬県で実習を行ったため、先生が実習校に挨拶に出向いて下さいました。その豊田先生の講義の時の話が頭の中をよぎったのです。

ある日、講義の途中である生徒が豊田先生に聞きました。「先生は、いつも腰に手拭いを下げていますがなんのためですか。」あの時代はノーベルトといってズボンにベルトがなく、ボタンがけで止めるズボンが流行り、ほとんどの人のズボンからベルトは消えていました。余談ですがミニスカート全盛の頃です。ズボ

ンからベルトが消え、そんな時代に前世紀の遺物みたいにベルトから手拭いを下げる。そんな先生を多分からかってその学生は聞いたのでしょうか。先生は、にこにこしながらおっしゃいました。「この手拭い^{てぬぐ}は昔、私が小学校の教師をしていた頃の名残りです。昔の校舎は木造で火事にでもなると火の回りが速く、とても危険でした。校舎は木造二階建であったので、二階で授業している時ももしも火災が出れば避難するのにとても大変です。だからこの手拭い一本でも、生徒を下に降ろしてやれる道具になるのではないかと思って、いつも下げていた名残が習慣になってしまいました。このような四階建の大学の校舎ではなんの役にも立ちませんね。」とにこやかに答えられた姿が田井先生の言葉のあとに鮮明に浮かんで来たのです。その時自分の描いていた教師像の曖昧さに顔が赤くなったことを記憶しています。

話がそれてしまいました。天才論を進めましょう。

天才とは、エジソンの言葉を借りて言うところ「九十九%の努力と1%のひらめきである」ということです。すべての人間はこの1%のひらめきを持って生まれているのです。そこが機械やコンピュータとの決定的な違いなのです。エジソンの言う1%とはすべての人間が同じ性質を持つものと言っているのではないのです。あるテレビ番組で全国規模の進学塾の経営者の方が次のように述べておりました。「しょせん蛙の子は蛙です。塾で頭を良くすることなど出来はしません。我々は各自の志望校にあったノウハウ、テクニクを教え各志望校に入れるのです。ですから我々は、ありとあらゆるデータを入手して、そのデータを売るのが商売です。」非常にその経営者の言った言葉は的を得ております。その通りなのです。真珠は真珠、エメラルド

はエメラルド、ルビーはルビー、ダイヤモンドにはならないのです。しかし、よく考えてください。真珠には真珠の、エメラルドにはエメラルドの、ルビーにはルビーの輝きといったように他の物と全く違った輝きがあるのです。玉も研かなければ光りません。しかし、ただ研けば良いというのでは全くないのです。エジソンの場合は、お母さんの手によって研かれたのです。皆さんも御存知の「奇蹟の人」ヘレン・ケラー。彼女を育てたのはサリバン先生。世界中の人を感動の渦に巻き込んだあの映画は永遠に不滅でしょう。スポーツ界にもこのような話はたくさんこっています。野球の神様とよばれたベーブルース。とにかく手のつけられなかった悪魔の彼を見込んで野球をやらせ、世界のベーブルースに育てた人。数え挙げれば有名な人の影には必ず良き指導者、理解者が登場しているのです。人間の一生の中で何が一番大切なのか、良き指導者、理解者にめぐりあえることなのかも知れません。

今の世の中は年功序列（悪い意味の）だの、ブランド名だのに迷い、惑わされている。今日においては天才は、天才の芽を摘み取られているのです。

昨年、ノーベル賞受賞にかがやいたマサチューセッツ工科大学の利根川進教授は、日本に来てテレビのインタビューでもおもしろい発言をしました。「私は日本を訪問しました。」その発言に対してある記者が「訪問でなく、帰国では。」と質問しました。彼が「私はアメリカ合衆国に税金を納めています。」と答えたのには、私としては拍手を送りたい気持ちでした。彼は物の道理を述べたのです。確かに生まれたのは日本かも知れませんが。育ったのも日本です。しかし今の彼はアメリカ人なのです。アメリカ人「利根川氏」がノー

ベル賞を受賞したのです。

利根川氏の物の見方の一面を記しておきます。「確かに日本は技術振興政策は進んでいるが、基礎科学をプロモートする点で欧米に比べて遅れていると思う。若い研究者の育成制度がない、国の研究費が少ないなど問題は多いが、もっと問題なのは日本社会の価値観や社会通念だ。相手を正統に批判することを認めない、ユニークなことをする人を認めない、権威主義で物事を決める、自分で決めて行動する習慣がない……」確かにその通りだと私は思います。

イノシシを改良して豚が造られたという話を聞いたことがあります。豚はもうイノシシとは言いません。最近バラの花を改良して、とげのないバラが造られたとか。バラからとげがなくなれば、もうバラの花ではありません。水も固まれば氷と言います。溶ければ水に戻ります。そのあたりを日本人はいい加減に考えすぎているのです。このところをしっかりと認識しないと、天才も、秀才も日本から生まれなくなってくるのです。

画一化された教育、矯正によって物の見方までが一方ずけられてくる。恐ろしいことなのです。そしてまた、子ども達の腕に腕時計がはまった日から、もう子どもの時間でなく大人社会（サイクル）が始まったのです。

学校から帰ると塾から塾へ。家に帰ってまた勉強しなさいと言われ、その合間をぐぐりテレビを見る。ファミコンをする。わずかながらの友達と遊び、時計を見ながら一日が過ぎて行く。なんら、一般の大人の一

日と変わらない。

たしか私の腕に腕時計がはまったのは高校に入学した時でした。それから一般社会人、サラリーマン時代までの約十八年間腕時計をしていました。会社を辞めて自分で会社を作り、今日に至る五年間、旅行や出張以外ではほとんど腕時計をしたことがありません。腕時計は便利な道具です。前にもコンピュータやテストペーパーは使う人間にとって便利な道具であると書きましたが、時計もまた時間を知る便利な道具なのです。腕時計、時間の手錠。そうです、ある意味において手錠なのかも知れません。あの犯罪者にかける手錠。逃げられないようにかける道具。使う側にとってはこれ程便利な道具はありません。かけられる側にとっては困った道具。

初めて腕時計を買ってもらった時の喜びは昨日のように思われます。その頃の腕時計はとても高くて自動巻など買えず、手巻きの時計を買いました。それから大学、社会人と時計を幾つか替えていきましたが、腕時計をしている頃の時間の概念と、腕時計を外してもう五年になります。が今では時間に対する感覚が変わってきました。一分、一秒と時間に管理される今の子ども達にとって腕時計は時間という手錠？になっているのかも知れません。

時間とは。時とは。どこの局であったか覚えておりませんが、ある深夜放送のテレビ番組が終わりになる時、女性アナウンサーの爽やかな声で次のように語っていました。「昔の人は人生五十年と申しておりますが、今や人生八十年などと言われ、だいぶ人間の寿命も延びました。三十年も時間は延びたのですが、実

際、昔の人と今の人では時間の感覚が違っていて、昔の人の方が一生が長く感じられたかも知れません。なぜなら現代の毎日は一日一日何かを考えるなどという余裕もなく過ぎてゆき、喜びも、悲しみもあつという間に過ぎ、私の今日の番組もこれで終わります。きっと昔の人の方が、人生の時間は長かったのかも知れません。」

時間は過去には進みません。後ろに返ることはないのです。SF的な発想なら別ですが、未来、前にしか進まないのです。この本を手にして読み始めたのも何かの因果（原因と結果）が始まったのです。

もしも、日本から天才や秀才などすばらしい人間を望むなら、それは時、時間との戦いかも知れません。時間はお金では買えません。人の一生（命）もお金では買えないのです。

仏陀（お釈迦様）の話の中で人間の因果についての話があります。ある国の暴君に対して仏陀は「一番苦しんでいるのはあなた自身でしょう。たくさん人間を殺し、今またこのように罪もない人々を奴隷として使う。」それに対して暴君は怒り「私はこの国の王である。当然のことをしているまでだ。」と言った。しかし、人間自分の後ろめたい罪悪感を誤魔化^{ごまか}すことは出来ません。仏陀と十二日間にわたる討論のあげく^{あげく}に悟ったのです。人間の因果、生まれて来たから死ぬのだということを。

生まれて来たという原因、死ぬという結果。人間の苦しみはこの原因と結果との間に存在する時間。その時間を過程とするなら、その過程をどのように修正（反省）しながら結果にたどり着くかを説いたのです。人は生まれながらにして奴隷として生まれたものではありません。差別されるために生まれたのではありません

ん。しかし、誰もが自分本位で物を見始めた時に差別が生まれてくるのです。王は悟り、奴隷を解放し、自国へ帰り立派に国を治めたという話です。

仏陀もキリストも世界の聖者といわれる人達は決して立派な衣服を身にまとい、宮殿に住んでいたわけではありません。自分の教えを広めるために二本の足で歩いたのです。

悟りとは、前にも「人間とは何か」「学問とは」でも書きましたが、頭で理解することではないのです。人間の五感（見る、聞く、においをかぐ、味、触る）の五つの感覚をすべて使い、第六感と言われる部分が悟りではないでしょうか。世界の聖人も天才だったのです。

少々天才論から外れるようなテーマかもしれませんが、必ずしもそうとは言えないのが次に述べる「遊びと勉強」ということだと思います。

私共の年代、あるいはそれ以前の年代の人々に聞いてみると、子どもの頃家にくすぶっていると怒られたものです。「子供は風の子、外で遊んで来い。」と言われたものでした。

暗くなるまで遊んで、時計など無くてもちゃんと夕飯までには家に帰ったものでした。それが昔の子供の一日ではなかったでしょうか。それがいつの頃からか子供の言葉の中から「遊ぶ」という言葉は親の前では禁句になってきました。親は子供を見ると勉強しなさいと言い、遊んでらっしゃいとは言わなくなりました。遊ぶという事柄はある学者に言わせると平安時代から大切にされるようになったという事です。平安貴族達は毎日遊ぶことに全力をあげたのです。それゆえに文学、芸術面に音楽に天才が数多く現われたのです。

紫式部の書いた源氏物語などは今日に至っても高い評価を受けています。

「私は今遊んでいます」は罪の意識。では「私は今勉強しています」は何の意識でしょうか。「遊ぶ」は悪い言葉。「勉強」はよい言葉？これで天才を望む方が無理でしょう。

そして書き残された聖書や教典などは見方を変えてみると、人類に対する黙示録もくじろく（警告書）であるように思えます。

理想と現実のくいちがい



今まで述べてきた各項目は理想だと言ってしまえば簡単です。現実とは違うよと言うのも簡単です。「言うは易く、行ふは難し」。

今までも文節のなかで度々テレビという言葉を使ってきました。今のテレビってなんでしょうね。テレビに映るものは本物でしょうか。すべて偽物です。本物が映るわけがありません。おいしそうな食べ物映った。食べられません。素敵な洋服が映った。着られません。当たりまえのこと、テレビとは虚像（うそ）なのです。真実がブラウン管を通して出てくるわけがありません。人間の夢が寸分たがわず現実にならないと同じように、テレビも夢なのです。子どもに聞いて御覧なさい「東京を知っている?」「北海道は?」「アメリカは?」「パンダ、コアラは?」。知っていると言えた子にきくと「テレビで見た」と答えます。車を買うときどれだけ車の性能をわかって買う人がいるのでしょうか。テレビの宣伝のカッコよさ、懐具合、そんなところでの車にするか決めているのではないのでしょうか。テレビのタレント、俳優、テレビを見ているこちら側の人間はよく知っていてもあちら側（テレビ側）の人間は全く知らない。人の不幸があると飛んで行くニュースキャスター、芸能レポーターの人達。そして決まて言うことは「今のお気持ち」は?。雑誌にしても一流出版社が出す芸能ゴシップ誌。作る方も視聴率だの売れば良い。見る方もおもしろければ良い。何が情報時代、情報が商品になるって、もう無茶苦茶で何が良くて何が悪いのか、全く訳の分からない時代になってしまいました。この前のニュース番組ですが、ある学校の生徒達が体の不自由な子どもを集団でいじめ、その生徒達に三人の先生が止めに入って、いじめている生徒達を殴り、一人に十日間のけがを

させ父兄から訴えられました。裁判所は先生の行いを体罰と見なし、五万円の罰金を言い渡した。このようなニュースをテレビで見、聞くと、判断する側にまちまちの勝手な解釈が出てくる。ニュース一つとっても解釈しだいで非常に危険なのである。ニュースを解釈してみると、五つの立場が出てくる。まずいじめられた側の生徒、いじめた側の生徒、止めに入った側の先生、以上三つは直接関係があるのだが、そこに殴られた側の親、それらを裁く側の裁判官と直接事件とかかわりのない人間の登場で、話が難かしくなってくる。それをテレビニュースという形で情勢が流され、六つ目の立場が介入し全く真実が読み取れない。テレビのニュースだけを見れば目茶苦茶な判決である。なぜなら先生はよい行いをした子を殴ったのではない。いけないことをしたのだから殴ったのだ。親だって自分の子どもが悪いことをした時怒らない親がいるだろうか。もしも怒らない親がいるとしたら、親の資格はない。

訴えた親も親なら、判決を言い渡した裁判官も裁判官と、ニュースのコメントからは聞き取れる。しかし私はその短いコメントだけ、情報だけでとやかく批判するのは危険だと感じる。情報とは、それらが判断できない人間にとっては凶器にすらなりえるのだ。

一年程前、ある十代の歌手の女の子が自殺をした。テレビの報道の自由とやらで何人もの若い女の子が、「私も、私も」と自殺をした事か。思い出して下さい。その責任はどこの局がとったのでしょうか。私の父も言っていました。昔も新聞で三原山が自殺の名所と載ると、とたんに三原山で自殺者が増えた。その事も勝手に死んだのだから、新聞社には責任はないのでしょうか。新聞、テレビはそのつど「報道の自由」と述べ

ますが、前にも述べたように「自由」とは自由を主張する権利を言うのではなく、どれだけ義務、あるいは責任が取れるかということによってその大きさも、範囲も決まってくる。その点で新聞、テレビが責任を取ったという事実を私は聞いた事がない。よく新聞は謝罪記事を載せたとか、テレビ局はテレビを通じて謝罪したと言いますが、昔から「謝って済むのなら警察はいらない」と言うように、今のマスコミは言論の自由を大きくはきちがえ、言論のわがまま、勝手な時代となっているのです。

いつもテレビの国会中継を見ていて感じることは、我々の代表者のとるべき態度ではないということです。はっきり言ってあれは質疑応答しつぎわうどうではありません。視聴者の誰にでも内容のわかる報道なら構わないのですが、あの質疑応答中に飛び交う野次は、呆れて物が言えません。日本人の私でさえそう思うのですから、外人なら何と見るでしょう。それを止めさせる事が報道の自由ではないでしょうか。簡単な事です。テレビ局は人々が不幸に会う度にニュースキャスター、レポーターを取材に派遣はけんしますが、そんな暇があったならテレビカメラをただ野次っているだけの国会議員に向けるのです。アップで全国に流し続ければ良識のある国会議員？は野次らなくなるでしょう。（あまりの怒りに技術論が出てしまいました。）

教科書問題で裁判中の沖縄の大量自殺について、政府は勝手に死んだと述べているようですが、世の中に勝手に自殺する者など存在しないのです。前の項で述べた因果（原因と結果）なのです。原因があったからこそ自殺という結果に至ったのです。

非常に簡単なことです。しかし、その簡単なことが人間は理解し合えないのです。

理想と現実の食い違いのおもしろい例をいくつか挙げてみましょう。

最初にテレビの番組から。日本の農業問題についての討論会がありました。初めのうちは各方面のお歴々が出て米の自由化について激論？をしていました。政府の立場、評論家の立場、農協の立場、聞いていると各立場の説はもっともな意見ばかり（理想）、そこに農民（現場の農家の人）二三人が加わり（現実）また討論開始。各著名人に農民の決定的な言葉「あんたら、そうやってしゃべっているだけで、幾らもらえるのかね。年収幾らとっているんだね。あんたらはそうやってしゃべっているだけで金になるかもしれないが、われわれ農家はしゃべってたんでは金にならねえ。」その一言で著名と言われる人々は一瞬黙ってしまった。その後彼らについては年収幾らとは言わず、テレビの出演料幾らとも言わずに必死に理屈をこねていた。

次は私の体験で、絵画や陶器を製作するとき理想を描いても腕が伴わなければどうにもならない。また、反対も言える。腕ができて理想が描けなければこれまた駄目だ。

今の世の中分業化が進み、どうも理想だけ追いかけている人間と、現実だけを追いかけている人間の二局にはっきりと分かれてしまっているようです。これでは良い仕事もできないし、人間同志の対立は避けられないようありません。

理想とは何か。これまた人それぞれに違ってくる。人間とは厄介な動物である。

しかし人それぞれが違っていても当然の理想像も、今の世の中ではだいたい統一化されてきている。テレビという情報伝達洗脳機のために、真実を見ないで批評を言う。ほんの一例だが、私が映画館の支配人だった頃

よく東京の映画会社の試写室で試写会を見に行った。その時、映画評論家の人達と一緒にすることがある。隣でいびきを立てて寝ていて、映画が終わり、映画会社からもらったプレス（映画の解説紙）を読んでテレビでご立派な解説をする。それを見てると怒ることよりも、呆れて「笑っちゃいます」。しかし笑ってばかりいられません。映画の批評ならさほど人間に与える影響は少なくて済みますが、事、人間の本質に迫る問題を常にテレビでは放送しているのです。

もうだいたい以前の事となりますが、大学時代の友達の結婚式でクラスメイトの女性と約七、八年ぶりで見ました。色々と学生時代の話に花が咲きましたが、おどろいたことに、彼女はフランスで生活していると聞くことでした。彼氏は日本人でしたが、そのなれそめは別として、彼女のフランスでの生活、考え方を聞き実際驚きました。彼女曰く「日本で子どもを育てる気などない。フランスでは、テレビなど見る人はほとんどいない。テレビがあっても蓋をしておくぐらいなもの。だから日本のテレビ局が取材に来ててもテレビの価値観が低いため、テレビ局の人をちやほやもてはやさない。ニュースはニュースペーパーで見、映画は映画館で見、劇は劇場へ。車は走ればいい。」。

ある時彼女の友達からこれから車で迎えに行くからパンタロンをはいて待っていて、と電話があり待っているとすぐにその意味が分かったそうです。なぜなら後ろのドアが開かないので前の座席からまたいで後ろに乗るのです。スカートではちょっと出来ない芸当です。食べ物是非常に安い。しかし、工業製品はとて高い。子どもの受験戦争もない。彼らは仕事に誇りを持っている。たとえて言うなら、靴屋のせがれに生

まれたら、フランス一の靴屋になってやる。それが彼らの望む理想だと話を聞いた時、今の日本との違いの大きさをつくづく感じさせられた。

フランスといえば第二次世界大戦のとき、フランスの誇るルーブル美術館の作品をナチスの手から命を賭けて守り抜いた国民です。日本の美術品は戦後どこに行ったのでしょうか。たくさん作品が流出し、今頃になって金のできたから買い戻す。もっと金のできたので、ゴッホの絵を五十億以上の金で買う。今の日本人はお金で理想で、現実もお金なのでしょう。日本のエリート社員がアメリカに行きバリバリ仕事をする。

そして同じ会社に勤めるアメリカ人の同僚から「今度美術館へ行こう」と誘われて「私は絵がわかりません」。また違う同僚から「今度劇を見に行こう」と誘われ「私は劇は分かりません」。またまた違う同僚から「劇場に音楽を聞きに行こう」として「私は音楽が分かりません」。この話を聞いた時、もっともだと思いました。仕事ができる、金儲けがうまいということと人間的に良いということは、根本的に違います。

教育の場からお金ですべてだという思想を強制されて育った子どもには芸術など理解する余地がないのです。前にも述べたように、国立すなわち日本国が経営する大学を受験するには、共通一次の科目が示すように、国、数、英、理、社の五教科だけ理解していればよいのです。その馬鹿げた試験内容をそのまま公立の高校が行う。美術、音楽、体育、技術家庭など勉強しても高校入試には、大学入試には何にもならない。これが今の現実です。

日本人から理想は消えてしまったのでしょうか。それとも日本人には元々理想などなかったのでしょうか。

お金と言葉と人種差別



お金と言葉と人種差別。この三つのことがらは、全く別々のように受け取られますが、今日の日本において、この三つがからみ合い大きなトラブルの原因になっているのです。

初めに、お金も言葉も人種差別も三つのテーマは人により大きく価値観が違っていることを頭にいれて下さい。それにこの三つのテーマは人間がもしも動物として生きて行くなら、必要のない、必要としない道具であることも頭に入れてから読み始めてみて下さい。

お金とは何なのか。何であつたのか。そして今は何なのか。

ここではお金の成り立ち、お金の歴史を研究しようというのではなしに、まず自分達一人ひとりにとってのお金とは何かを少し考えてみようではありませんか。

初めに書きましたように、今の世の中においてお金とはどんな道具よりも便利な道具になっています。その道具を手に入れるべく、人々は殺人まで犯すようになってしまったのです。人の心を踏みにじる、自分の心さえ偽る。お金とは道具です。道具には感情などありません。また、要求すること自体不可能です。持つ人、使う人によってお金は凶器にもなれば、ある意味において人間を幸せにするでしょう。同じような言葉を耳にしたことはありませんか。日本の武士道の中で、武士の提げているあの刀は人斬り包丁だったのでしようか。人を斬る道具として刀鍛冶は身を清め刀を打ったのでしようか。

お金の製造現場をテレビで見たことがあります。大蔵省造幣局の輪転機が猛烈な速さで、紙幣を刷りだして行く、人の感情などそこにはさむ余地などありません。

「気違いに刃物」「金の亡者」という言葉がありますが、今の日本はまさにお金の亡者が集まり、お金を刃物にして、暴れまくっている姿が眼に浮かびます。

お金をトランプに例えてみると良く分かります。お金はトランプのカードの中の何にあたるのでしょうか？トランプとはどのようなカードで出来ているかまず思い起こしてください。そうです。ダイヤ、スペード、ハート、クローバーの四組とそれぞれの種類のカードに一から十三までの数字があり、四×十三で合計五十二枚のカードから成り立っていますね。さて、それではどのカードがお金にあたるのでしょうか？ダイヤでしょうか？そうですね。これらのカードだけではお金にあたるカードは見つからないでしょう。もうおわかりの方もいると思いますが、トランプにはもう一枚のカードが存在します。そのカードこそジョウーカー、すなわちお金に匹敵するのです。ジョウーカーはオールマイティーなカードとして使われる場合が多いのです。お金もジョウーカーと同様にオールマイティーな道具として使われています。しかし、良く考えてみると、ジョウーカーはジョウーカーで、ダイヤ、スペード、ハート、クローバーのどのカードにも変わることは出来ませんが、あくまでジョウーカーはジョウーカーなのです。ダイヤ、スペード、ハート、クローバーそのものになることは出来ません。あくまでお金はお金以外の何者でもなく、便利な道具なのです。

私がサラリーマンをやめ、有限会社を設立するにあたり、今は亡き原沢税理事務所の原沢泰典先生にお世

話になり、いろいろとご指導、ご鞭撻^{べんたつ}をいただきました。全く経理など知らなかった私ですが、おかげでどうやらやってこられたのです。

いくつか先生との会話を述べてみましょう。「脱税など考えるだけ無駄な事は止しなさい。節税を考えるのです。節税を考えるのは我々の仕事で、貴方は自分の仕事に力を入れればいい。」。会社が出来て間もなく、伝票付けに手間取っていた私はぜひコンピュータを入れたいと先生に相談したところ、にこにこ笑ってこう答えました。「コンピュータを買ってテレビゲームでもするのなら買っても良いが、外のことには使えないよ。コンピュータとは便利な道具かもしれないが、不便な道具でもある。」。私は顧客管理と棚卸しに使いたいと相談したところ、「人間の目と手の方が速いし、修正も速く出来る。貴方の会社程度ならコンピュータなど入れればかえって不便になるよ。」。なぜにこんな事を言ったのか、その便利な道具を買ってからはじめてわかりました。買い求めたパーソナルコンピュータは今ではただの箱になっています。ほとんどワープロを使っており、そのワープロも二台目です。

それらのコンピュータ、ワープロを買ったお蔭で、またよけいに働いてお金を稼がねばならなくなったのです。私の会社ではコンピュータはお金を稼ぐ道具ではなかったのです。去年大ヒットした映画「マルサの女」をここで紹介し、少し税務に触れてみようと思ったのですが、専門的な道標となってしまう、人生の道標からはずれて行くために、いずれ機会があれば書いてみたいものです。

お金とは働いた結果の報酬であると前にも書きましたが、今は自分は仕事をしないでお金に働かせてお金

を作ろうと考える人々が増え、世の中が混乱しています。

道具が道具を作っても人間が幸せになるはずがありません。それを幸せと感じる人は、もうその道具に支配され洗脳されている人々なのです。

お金がすべてなのでしょうか？もう一度ここでエジソンの言葉をあてはめて考えてみてください。「天才とは九十九%の努力と一%のひらめきである」この言葉を借りて言えば、お金は九十九%の品物が買えるが、一%のひらめきにあたる人の心は買えないのです。

人間にとってその一%が一番人間らしいところではなかったでしょうか。

お金に対する人の価値観は統一されているように見えて、実は意味不明なところが多いものです。簡単に考えてみても、小学生の一カ月の小使い、中学に行ったらいくら。高校に入ったからいくらにする。平均的にこのくらいだろう。などと意味不明なことをいかにも意味ありげに決めています。

食べ物の値段、異常な東京の土地の値段、大学の入学金、ゴッホの「ひまわり」の値段、その他すべての値段。こうやってみると、全く人間自身が製作、生産していないものにまで値段がつく。人々が勝手にありとあらゆる物に勝手に値をつける。そして多くの人々がその値を暗黙のうちに了解する。その中で「おあし」と称するお金が動く。これが社会の金の流れだなどと誰が決めたのだろうか？経済学者が決めたのか、政治家が決めたのか、時の権力者が決めたのか。

千円札の価値観は人によって決して同じではありません。人によっては一万円の価値に感じる人もいれば、

百円にも満たないと感じる人もある。昔の人はこんな事を言った「一円を笑う者は、一円に泣く」。これだけ物という物があふれ出した世の中で、お金の価値観はどれだけ狂ってしまったことか。本来物と物の交換（物々交換）、労働と労働の交換だったものが、いつの頃からかお金というモンスターが生まれ、人間とはかわりのないところで動き始めてしまった現実だけは直視しなければなりません。

各自がもう一度道具としてのお金の使い方を自覚しないかぎり、人間は永遠にお金の奴隷となるだろう。これも教育批判になるが、生まれてから 学を卒業するまでのカリキュラムの中にお金に関する教育など載っていない。高校に行ってもほとんどの学校でアルバイトは禁止。物事の善悪を一番考えるときにすべてのことがらを禁止したのでは「人間の労働の価値、その結果のお金」が理解出来ないのは当然なことなのである。

余談ではあるが、私が小学生の頃は朝の新聞配達は小学生、同じく朝の納豆売りも小学生の仕事であった。ニュースで見たのですが、アメリカの新聞配達も小学生が多く、新聞社が合理化のため子ども達の解雇を宣言したところ、小学生がデモ行進をしたのでした。両親達はにこにこしながら見守っていました。

例えば少し違いますが、親が子どもに「そんなあぶない自転車の乗り方をして」と注意しますが、本人はあぶないと思っていないので気がつかない。そこで「うるさい親だ」と思うぐらいである。ところが、本人が事故に会う。すると、あぶない目に合って初めて「あぶない」が分かる。法律ではバイクは十六歳から乗れます。しかし、免許を取っても卒業まで高校側が免許を没収、預かってしまうので高校生のバイクは実際

には禁止されています。あぶないことはすべて禁止、禁止です。勉強机に向かってさえいけば勉強していると思うアホは親達。コンピュータが会社を支配し、コンピュータに向かっていけばテレビゲームをしているも仕事をしていると思うアホな管理職。「あぶない」、「そんなことはいけない」と言う人に限って自分では体験している人なのである。私は人に意見すること自体をとにかく言っているのではない。本人が体験しなければわかりえない事柄までもただ「禁止」という言葉で片付けてしまっている今日、道具の使い方を知らない人々が増えてきている現実は無視できないのです。

なんだか「道具とは何か」というテーマの様相になってしまいましたが、一番大事なところなのでもう少し続けます。赤城山で陶芸をしている大学の後輩が訪ねてきてこんな話をしてくれました。『最近、大学のゼミの学生が訪ねて来て、焼き物をして行ったのですが、その時、「今大学で何を習っているの？」と尋ねたら、「ええ、鉛筆の削り方や消しゴムの使い方を丁寧に教えてもらっていて、感動しています。」と答えました。先輩どう思いますか？』。私は、その時あきれて言葉も出ませんでした。確かに私の教室に通う子供達も鉛筆は削れませんでした。やったことがないのです。出来ないのは当然です。誰が悪いのかといえば、親や学校が悪いのです。子供達に鉛筆を削らせてみるとすぐに削れるようになります。前にも述べましたが「あぶない」から子供にナイフを与えない。その結果鉛筆が削れない。同じように包丁を持たせない。だから料理ができない。すべて当然のことです。誰が悪いのですか？出来ない子供達ですか？技術などというのは、毎日の積み重ねで身に付いて行くものです。多少の上手、下手は生まれるでしょうが、そんなところ

に問題はないのです。

言葉とは

これもお金の項と同じように言葉の起源について語るのではなしに、今日我々が日常使っている言葉について考えてみよう。

言葉も便利な道具である。もしも今の世の中から言葉がなくなってしまうたら、電気、水道、ガス、電話などがなくなると同様に、文化生活を維持できなくなってしまう。

もちろんテレビから言葉が消え、現在のかたちでのラジオは存在しなくなり、毎日音楽だけを流すようになるでしょう。

道具とは一度使い始めると便利なもので、その道具が適切であるかないかにかかわらず、乱用される傾向があります。子どもは初めて言葉を覚えると何度も繰り返して身につけます。道具とはなんべんも書きますが、一歩間違えれば凶器となり、とても危険なものであることをしっかり認識しなければなりません。電気にしる、ガスにしる使い方を間違えれば人の命も奪います。また、使い方次第では、人々を幸せに導いてくれます。

その言葉ですが、言葉は他人に自分の意志を伝える道具であると言いますが、ほとんどの場合この言葉と

いう道具が、道具としての価値を発揮していない場合が多いのです。なぜなのでしょう。言葉は目にも見えず、触れることも出来ません。時間のなかに止まってもいないので、口から発せられた言葉はすぐに消えてしまいます。音楽も良く似た性質を持っていますが、言葉のように一言一句聞き取り、考えてからまた言葉を発するという作業と根本的に違います。日本語は世界の言葉のなかにおいても特に複雑な言葉だそうです。たいていの日本人はジュエチャーが苦手ですが、その複雑で表現力豊かな言葉ゆえに世界に類を見ないほど体で物事を表現できない国民となってしまうたのではないのでしょうか。

日本語はありとあらゆる(?)ことがらについて漢字、ひらがな、カタカナ等で表現しておりますが、いかに優秀なコンピュータでも、その扱う人間の能力以上の事ができないのと同様に、今日の言葉は国民一人ひとりが使いこなせないような状態になってはいませんか? 従来 of 日本語 (方言など含めて) は戦後の教育体制によって個性を失いました。外国語が複雑な日本語の中に著しく流入し言葉の混血が生まれました。その風潮はますます強まり、意味不明な日本語が出来上り親子の断絶、人間不信にまでつながって行くのです。「人間は話し合えば分かり合える」と言いますが、今の日本語は話し合えますますます分からなくなるのではないのでしょうか。

少しおもしろい話があるので載せておきましょう。筑波大学助教授熊倉功夫氏著、近代数寄屋者茶の湯第四回「高橋箒庵の処女作」の中からわかり易くまとめて書いてみましょう。

『時事新報』に入社して、早速、福沢諭吉の代筆をした高橋義雄は、論説を書くかたわら単行本の著作を試

みた。生涯に数十冊の書物を刊行した大著作家の第一作は、後世の数寄屋者のイメージからはほど遠い書物である。題して「日本人種改良論」。明治十七年九月の出版であるから、義雄が二十三歳の著書である。

「日本人種は西欧の民族に対して肉体的に劣っている。例えば、ヨーロッパ人男性の平均身長が一七一・三センチ、女性が一六〇・五センチなのに対して、日本人男性は、当時の体操伝習所の報告によると一五九センチにとどまり、欧州の女性の平均身長にも及ばない。ことほど左様に、体重も脳味噌の量も日本人は劣っているのだから、すべからず欧米人と結婚して人種の形質を改良しなければならぬ。」

「食べ物について、身体が衰弱するから肉食が是非とも必要だ。当時の一人当たりの牛肉の消費量はわずか一年で四百グラム程度にすぎなかった。そこで義雄は大いに牛肉ばかりでなく豚や羊の肉も含め、さらに牛乳の飲用を声大にして説いた。」

「次は衣服と姿勢。そもそも衣服とは寒さを防ぐばかりでなく、体の動きやすさ、便利さを損なわないのが第一である。であるからして当時の和服について二本の足を筒にいられておくのは、走ったりするには不便。しかも帯をその上からグルグル巻きにするのは桶をタガで締めるようなもの。そこで、洋服を着るとなると日本人の座る姿勢は窮屈だ。われわれもスーツで長時間正座するのは苦痛だし、ズボンもシワクチャになってしまう。だから洋服にする以上、正座も止めた方がよい。」

「外国人は椅子とテーブルの生活であるから、この人々に正座をさせると背中をまるめ、首を伸ばそうとするが、結局重心を失ってひっくり返ってしまう。つまり、正座はまともな座り方でなくて、異常な姿勢だ。

そのために内臓を圧迫し、胃や腸の働きを妨げているのだから、正座をやめて、住宅を洋式にせよ。」

実際には著者の御本人もそんな生活をしていないのだからこれは机上の空論だが、百年後の今日のわれわれの周辺を見渡すと、義雄の説くようになってしまったから不思議である。日本人は高橋義雄のいう外国人になってしまった。当然、この論に対して批判者は現われる。その一人は、福沢諭吉の論敵の一人、加藤弘之（初代東京帝国大学総長）。当時は開化主義者より保守主義者に転じており、こんな改良論はとんでもない。それでは改良でなくて日本人の絶滅である。と批判した。』

以上の文章を私は非常におもしろく読みました。これは今から百年以上も前の二人の日本人の考えた事を文字に表わしたものです。解釈するにあたり一つ付け加えておきましょう。確かに熊倉氏の言うがごとく日本人は、百年後西洋人になってしまったかのように見えますが、心からなれないところに、今の日本人の苦しみが生まれてきているのではないのでしょうか。表面的には日本人が日本人でなくなった今日、日本人の風習だけは根強く生きています。姿、形が西洋人になっても人前でキスをしたり、抱き合って喜んだり、抱擁したり出来ますか？やはり日本に住んでいるかぎり、日本人なのではないのでしょうか。

この百年の間に西洋文明がどんどん日本に入り込み、言葉の上でも横文字が増えてきたため、言葉が言葉の意味を持たなくなってきました。やはり言葉という道具だけでは日本人は完全に外国人になることは出来ないのです。

ここで一言、なぜに日本人は日本人であることを捨てたがるのでしょうか？いいじゃないですか、日本人

で。日本人の辞書から「誇り」という文字は消えてしまったのでしょうか？とにかく人間としての誇りと、エリート意識とは全く別なものです。人間としての誇りが消え、変なエリート意識だけが日本中をわがもの顔に、大手を振って歩いている。結局今の日本は外国になったのでしょうか？いいえ、外国でも日本でもない国（苦に）になっているのではないのでしょうか。余談ですが、日本人は技術論の好きな国民です。やたらと屁理屈を言いたがる。私も同じ様に屁理屈を言っているのかもしれないが、特にA型の血液型のゆえであろうか。

現代用語の基礎知識という本はまことにぶ厚く出来ている。その筋の専門用語の山である。日常でも見たり聞いたりする事はあるが、株の取引の会話、医者同士の会話、政治家同士の会話、その他専門家の人達の会話。七〇年安保の学生運動の言葉、言葉使い。異常ともいえる会話、言葉。部外者が聞くと意味不明な言葉。普段生活を営むのに必要でない言葉が次々と作りだされてくる今日、中学、高校、大学の教科書は特に専門用語の塊である。一つの事柄を説明する度に「以上述べた事柄を次のように呼ぶ……」。そのつど専門用語を作って難しくしています。学問でそんなに難しくしなければならないものなのでしょうか？私から言わせれば学者の自己満足、オナニズムにはかならない。それらの専門に興味もない生徒達にとっては、そのような専門的言語、勝手に学者が当てはめた言葉を強要させられたのではたまったものではない。七〇年の反省としても、あの学生用語のために一般の市民には理解できなかったのでしょうか。理解できなかった方に責任があるのでしょうか？

言葉とは簡単に考えれば自分の願望を述べる言葉、物とか現象を指して言う言葉の二つの組み合わせしかありません。言葉もお金の項で述べた通りトランプのジョーカーと同じで、何にでも使えますが、ジョーカーはジョーカーでスピード、ハート、クロバー、ダイヤの代役以外の何物でもないのです。

ここで少し評論なるものに触れておきましょう。この本も見方によっては評論にはいるかも知れませんが、日本中のすべての職業に評論家と呼ばれるような人が存在する今日です。なかには確かに文字や言葉で評論することが可能でしょうが、人間の感性についてまで今の評論家は評論してしまいます。不可能なことを可能にしてしまうスーパーマンみたいな人達がたくさん登場しています。

芸術の評論、音楽の評論、グルメブームと言われておりますが、食べ物物の評論家もおりすごいなと思います。しかし、よく聞いてみるともののように聞こえる話も、不思議な事に気がつくはずで、食べ物物の例を挙げてみます。「これは最高においしい食べ物です」という言葉を仮にあげてみますと、私たちが料理を食べて「うまい、おいしい」と感じるのは、十人が十人ともすべて違った感覚(味覚)で「うまい、おいしい」と言っている筈です。決して一人ひとりの味覚を言葉や文字で表現しきれものではないのです。なぜに無理やりこじつけてもってもらいたい評論をするのでしょうか。評論家の先生と言われる人達の話を真面目に聞く人々も決して分かる事が出来ないはずで、前のテーマで料理について触れましたが、料理とは「理解する」と「分かる」とは全く別な次元なのです。

「芸術を文字や言葉で表わせるなら、何も画家は必死でキャンバスに向かう必要性が出てきません。」

（「」の中の画家という言葉とキャンバスという言葉をおきかえて考えてください。」

つけ加えておきます。

人間同士の喧嘩も原因はとても些細な事ささいなのですが、ほとんどの場合物の見方からくる言葉の違いにより喧嘩がエスカレートして行きます。日本のことわざの中にも「見ざる、言わざる、聞かざる」そして「沈黙は金なり」などという言葉が生まれてくるほどですから。一言一言、言葉とは扱うのに大変難しい道具なのです。

人種差別

日本人ほど人種差別を行っている国民は、世界にはないと言った学者がおりましたが、その通りだと思えます。外国の人種差別とは、白い、黒い、黄色いといった意外に単純な（単純とは少し語弊もあるが）所の出発点から出ていますが、日本人の差別は同じ人種、同じ色の中から出てくる差別なのでとても始末の悪い人種差別（人間差別）なのです。

すべてのことがらが差別から出発している社会構造のため、一見差別に見えなくても、被害者意識、加害者意識が常に存在しています。

差別はほとんどお金と言葉から生まれてきます。「お金持ち」「貧乏人」、「知識人」「一般人」等のよ

うに差別する側もされる側も紙一重で、なんの根拠で差別をしているのか又、されているのか良く理解しないで差別しあうという変な国民です。

ここで少し例を挙げてみましょう。七、八年前、ごみを出すのを忘れたまっていたので市のごみ処理場へ運んで行ったことがありました。受付で「済みません、ごみ屋さんに出すのを忘れて、運んできたのですがお願いします。」と言ったところ、「ごみ屋とは何だ。市の清掃局員と言え。」と青筋立てて怒られました。その時は一瞬意味が理解できませんでした。ごみ屋さんというのは差別用語だったらしいのです。ここで少し差別用語なるものを明確にしておこうとして色々な本を調べたところ、載っていません。困って東京の出版社に電話で確認を取ったところ、以前は差別用語として言葉を紹介していましたが、今日においては差別用語そのものを抹殺する、ということですのですべての辞書から消えてきている。古い辞書なら載っているでしょう。という答えであった。それに付け加えて色々お話をしていたきましたが、古典落語などでは差別用語が出てくるということで、披露出来なくなってしまうった題材もかなりあるとか。テレビ局、ラジオ局などは独自に差別用語のテキストを作って持っているとか、かなりその筋の反対の圧力が差別用語の抹殺に力を入れていたようでした。

ですから、差別用語に関する学術的裏付けが取れないまま書いていきます。確かに差別用語というものは人を苦しめる道具です。日本人ほど差別する国民はない、社会構造が差別の上に成り立っていると文頭にも書きましたが、いくら小手先で言葉まっさつを抹殺しても本質が変わらないかぎり次から次へと差別用語は生まれて

きます。道具を改良してみても使う人間の良心を変えない限り、次々に新しい差別用語が日に日に生まれてきているのです。数年前になりますが、子供同士の中では「ばいきん」という差別用語が生まれたのだそうです。あだ名も人によっては差別用語でしょう。言葉という道具が存在する以上その道具でお互いを差別し合う、これは蛇が自分の尻尾を飲み込む（ウロボロス）のと同様に、言葉そのものをなくさない限り不可能なことです。しかし、なんべんも書きますが、道具は使う人によって良くも悪くもなる事を忘れずに教育をすれば済むことで、一番大事な教育を忘れて言葉という道具だけをいじってみたところで、何にも解決はされないのではないでしょうか。性教育についても同じ事が言えるのですが、性については次の項で述べるとして、もう少し言葉と人種差別について書きましょう。方言を例に挙げてみますとこれまた差別があります。田舎者とか、あんなに訛っていると差別するわけですが、出身地がどこかでも差別をします。背が大きくても馬鹿にされ、小さくても同じく言われ、外見や言葉の使い方で差別される。これらの言葉による差別の外に、お金によって、お金を持っているか持っていないか暗黙のうちに差別されている場合もあります。お金即ち権力につながり、その権力を使って人々を差別する。

ここでもう一つ困った存在で、学歴による差別の例を挙げて考えてみましょう。ある雑誌社の方が私に取材にきたときのことでした。色々の社会問題を話していたのですが話の終わりになって、私に彼が体験したエピソードを話してくれたことを紹介しておきましょう（雑誌社の彼はまだ二十代半ばの長髪の好感の持てる青年です。）。

『まだ私が社会人にならなかった頃、今流行のコンビニエンス・ストアでアルバイトをしていたこと。毎日午後の九時から十時ごろにかけて、塾帰りとおもえる子供達が寄ってマンガの立ち読みをしていきます。ある時数人の中学生とおぼしき女の子達が私のほうを見ながら何かひそひそ話をしているのです。何の話をしているのかと思っていると、その数人の女の子達がやってきて一人の子供が私にこう聞いたのです。「お兄さんちょっと聞いてもいい」私は子供達に「何か用かい」と言うと、女の子の一人が「お兄さんは中学出？」と私に尋ねるのです。私は敢えてその答えを述べずに「どうしてそう思うの」と尋ねたのです。女の子は「だってこういうところで働いているのは中学出の人じゃないの？お兄さんみたいに髪の毛延ばしてジープンはいて仕事をしているのは？」「家のお父さんは会社がお休みのときぐらいしかジープンなんかはかないもの」そこで私は女の子達に「お兄さんは、高校を出てから音楽が好きだったので大学ではないけれど音楽の専門学校に入って、今、音楽を勉強しながらアルバイトをして働いているんだよ」というと女の子達は「ふーん」といって帰って行きました。』

この会話を聞いてお読みになっている皆さんはどのようにお感じになるでしょうか。

当然女の子達の発想は中学生の発想ではありません。大人の主婦のかたの会話にこのような会話が出てくるのを耳にします。

差別とは、「区別、ちがひ、區別して扱うこと」と辞書には載っております。お金＝権力、言葉＝エリートといったような考え方が存在し始めて、「そんな事言ったって仕方がない」という言葉の考え方、「そん

な事一銭にもならない」というお金のとらえ方が広がっています。その考えに拍車をかけるように学校教育の場でも成績優先の立場をとっている限り差別をなくすための技術をどんなに手を加えても、臭いものに蓋をしたにすぎません。いずれ蓋のすき間から匂い出すことは、一般の公害と大差はありません。言葉の公害、お金・権力の公害、公害にしる病気にしる害がすぐに表に出てくることは少ないように、一つの癌細胞が無数に広がるまでには時間がかかります。そして癌細胞も一種類だけではないのと同様に、差別も一つの形の差別だけでなく無数の差別が存在し、現在ではその場の応急処置だけに氣をとられ、差別の本質を理解しない社会構造になってしまいました。臭いものに蓋ができて内なら良いが、臭いものが溢れ出してきたいる今日、勇気を出して蓋を開け臭いものを排除しないかぎり差別は消えないのです。しかし悲しいかな、たとえ努力してもまたどこからか臭いものは生まれてきます。しかし、人間として生まれてきたからには臭いものを取り除く努力をし、なぜ臭いのかを考えない限り人間失格でしょう。

車を運転していますと、時々運転中のドライバーが空き缶を外に捨てたり、食べ物のごみを捨てるケースを見かけますが、自分の車すなわち自分のエリア内だけ綺麗になれば、回りは公害の山になってもおかまいなし。どうやら日本人の性格の中に基本的に以上のような「自分勝手な心」が根強く生きているのでしょうか？

教育技術用語に指導要領、通知表、教育評価、偏差値、輪切り、診断的評価、形成的評価、総括的評価、相対的評価、絶対的評価、到達的評価などがあります。これらを駆使した技術論の中から生まれた「いじめ」という言葉。校内暴力、落ちこぼれ。こういった臭いものにはみんな蓋をしてしまうという姿勢。よくない

からどこを直せばよいとすぐ技術論に走る教育者と言われる人間達。お金という差別の中に含まれることがらで、ダム建設の例を挙げてよく考えてみよう。少し前になりますがテレビのドキュメント番組でダムの底に沈む村を取材していました。本質は何も写していません。「涙ぐむ村人達」「村を去る幼き少女」。ダムを造らなければ大都会の水瓶が足りない。水不足解消のため、村にも金がおちて、村民にも損はさせない。色々な言い分が飛び交っていました。私の住んでいる群馬県も東京都の水瓶としてのダムをかなり所有しています。今年の冬も雪不足で早くも夏の水不足を心配しています。

去年（昭和六十二年）の夏のある深夜のラジオでこのような話を聞きました。「私の家は東京でも早くから水洗トイレにしたため、色々な人が参考のために見学に来ました。これからの便所は水洗で衛生的でなくてはならないという事で、モデルケースとして有名になったのですが、この夏の水不足で私の父のしたこと即ち水洗トイレの普及は正しかったのか疑問を持ちました。汚物を大量の水で遠くまで流す。確かに自分にとっては気持ちの良い事かも知れません。しかし、汚物といっても人糞などはほかに利用価値のあったものです。」この言葉のなかにダム建設自体の人種差別の答えがあるのです。そうです。東京都という金の集まる所の人間の、あるいはペットの排泄物を押し流すためのダムなのです。人間一人が一日に飲む水の量など微々たるものです。自分の身の回りだけが奇麗になれば、他人が土地を奪われても、自然が破壊されても、子どもが悲しい思いをしても、全く関係ない。テレビでは東京の飲み水が足りないとニュースやコマーシャルで流すだけで、東京都民の排泄物を流すためのダムだとは決して言わないところに金による差別の根本が

あり、田舎の人間などより東京の人間の方が大事だという差別にはかならないのです。すべてに差別的感情を含んで毎日が過ぎて行く。こんな日本はどうなって行くのでしょうか？一番大切な心は思いやり、そして相手の立場を尊重することであるということがまた一つ日本の辞書から消えて行くのでしょうか。相手の立場を考え尊重する心が芽生えてくれば、おのずと差別などは消えて行くのです。

性について考えてみよう



性についても専門医学から見た性を考えるのではなしに、私が感じた性の見解を述べて行きます。本来この題材は人間とは何かで述べるべきテーマではありますが、あえて独立させておきました。大学時代、友人とよく二人で保健室に行っては校医さんに性教育を講義していただいた（この時の講義は一般の講義をさばっても聞きたい講義でした）。医学的見地からの講義で、私がそれまでに思っていた週刊誌程度の誤魔化しの性知識との違いがはっきりとした。かれこれ十八年も前のことである。現代では性に関する本は本屋さんに行けば一つのコーナーが出来るほど並んでいるので、関心のある人はそれらの本を参考にしていたきたい。付け加えておきますが、校医さんは若くて美しい女性の方でした。その校医さんは「貴方達に講義していることは、本当なら中学生、高校生の男の子、女の子皆にしくはない事なんだけれど。」とおっしゃっていました。

もう一つ大学時代の話をします。保健体育の授業で、助教教授である竹田先生が珍しく「室内で講義をするぞ。」とおっしゃられました（その頃の大学の体育はレクリエーションに近く、私がまとめ役をしていたので、先生のところに行ってはバレーボール、バスケットなどと自分達の好きな運動を選んでいた）。その講義の中で先生は性について講義をしていたわけですが、突然このようなことをおっしゃられたのです。「男と女は悲しい生き物だ。どんなに愛し合っても俺には女房の性感度は分からない。俺も学者として学問の上ではオーガスムという曲線は理解できる。男だから男の快感は分かるが、女の快感は一生分からない。悲しいことではないか。」講義の述中に語られた言葉の中に性の本質があるように思えます。私が文の始め

からこの項にいたるまで、頭で理解した事は分かったという事とは異なる、と書き続けてきましたが、男と女の性の問題はお互いが頭の上だけで理解する以外、男と女が入れ替われないだけに、永遠に理解の領域を出られない、分かり合えないという悲しい存在なのでしょう。分かり合えない悲しさをまぎらわすために、分かり合える人を次から次へと捜し続けて行く。世間で言うところの「浮気」といった現象の要因の一部にもなって現れているのかも知れません。最も分かり合えるという点で「同性」に好意を寄せて行く現象もあるでしょう。

私がまだ映画館の支配人をしていた頃、かれこれ十年も前になりますが、ある会合に出席してほしいと私の勤めていた会社の要望で出席しました。何の会合か詳しく聞かないままに出席をしましたが、その会合の趣旨は「青少年の性犯罪の防止」というテーマだったのです。出席していたのは各方面のお歴々、まず警察署長以下数名、そしてPTA連合会長以下数名、教師数名、各地区の市民の代表といった具合で、その人々が裁く側なら、裁かれる側といった人達に映画館の代表として私、危険物、シンナーなどを扱っている業者、本屋さんの代表、自動販売機の会社（主にビニ本といわれるポルノ雑誌の販売機を扱う会社）の代表、しかしこの業者は欠席、と青少年に悪影響を与えらると思われる業者の方々が出席し、討論会となったわけです。あの時代はポルノ雑誌が氾濫し、映画館のポルノ映画のポスターなども問題になっていました。私の劇場はポルノ映画は上映しておりませんでしたが、どうやらポルノ映画館の館主さんが出席できないとかで私の会社と相談があり、私に白羽の矢が当たった模様でした。まず会議が始まる前に色々性犯罪の実際と、検挙

数、尋問結果等の資料を与えられその説明がありました。初めに報告事項として、各地区の補導員がポルノ雑誌の自動販売機の撤去をなし遂げるまでの経過について「どここの自動販売機を撤去しました。」と胸を張って経過報告をしておりました。次に各業者の方々の御意見はということで順番に意見の交換が始まりました。「シンナーなどは子どもには売りません。」「ポルノ雑誌はなるたけ書店では売らないようにする。」など、いよいよ映画館の私の番になりました。自分の劇場がポルノ映画を上映していないという強みから次のように述べたのです。「みなさん、お歴々のおそろいの中で私が一番若輩者（当時二十八、二十九歳だった）のように見受けられますが、生意気なことを言うかも知れませんが、とにかく聞いて下さい。先程からポルノ雑誌の自動販売機撤去のお話がありましたが、ポルノ雑誌を日本中からなくしてしまえば、また劇場のポスターから裸をなくせば性犯罪は消えてなくなるのでしょうか？外国帰りの大人達は、あれやこれや考え必死で持ち込み税関で取り上げられる。それらのポルノ雑誌は年間で莫大な量になると聞いております。大人が見たがる物を子供が見たがったり、知りたがったりするのは当然なことではないでしょうか。劇場のポスターを貼るのを止める、テレビからSEX場面を止める、それで性犯罪がなくなるのでしたらどんなに簡単なことでしょう。人間にとって性とは何か、なぜにもっと学校教育の場でしっかりと教えてあげないのでしょうか。日本の性教育は先進国に比べると二十年も遅れていると聞きおよんでおります。」と述べた時に忘れもしません、PTAの連合会長だったと思いますが、御年配の御婦人が「その通り」と声をかけて下さいました。そして出席していた各学校の先生達に「あなた方の学校では、性教育について子ども達

に何を教えていますか。」と質問され、その質問に答えられた先生は一人もいなかったのです。差別用語でも書きましたが、ただ禁止、禁止、なくしてしまえば良いという考えで「臭いものには蓋をしろ」と言って勝手に大人達が蓋をしてしまったのでは、された側の子ども達はたまったものではありません。その子ども達も直ぐに大人の仲間入りをするのです。いつまでも子供のままではいないのです。

性とは人間の営みの中でも最も大事な営みの一つではないでしょうか。よく大人の会話でSEXの営みを「汚らしい、いやらしい、不潔」などと言いますが、私はそういう人々に聞きたい「それでは、貴方は汚らしい、いやらしい、不潔な行為を両親が行った結果貴方は生まれて来たのですか?」と。

日本人の性教育では便所から出てきた子どもに「汚いからよく拭いてきた。よく手を洗っておきなさい。」と教えます。人間の下半身は汚いところなのでしょうか?外国の性教育では「大事なところだからいつも綺麗にしておくのですよ。」と教える。以上二つの差は表と裏ほどの違いがあるのです。

成人映画というものがありますが、あれは一体何なのでしょう。「十八歳未満お断わり」と看板に書いてあります。その他にも写真でヘアーが見えたの、見えないのと論議し、あげくの果ては芸術だの芸術性がなだの關係ないところで論議が始まります。とにかく日本人は論議が好きで、論議というよりは屁理屈を言いたがる国民なのでしょう。

性の問題は論議でもなければ、理論、理屈でもなく、完全に屁理屈以外の何者でもないのです。戦争で殺し合いの映画、首が飛び、身体がバラバラにされる残酷な映画は成人映画ではありません。人間なら誰もが

いとなむ性行為は愛の表現の一つであり、言葉に変わる言葉なのです。その性行為という言葉がきたないということ、十八歳未満お断わり、人殺しの映画は見てもけっこう、何が何だか分かりません。人が人を殺すこと自体許されるはずがないのです。それを見るのはけっこうです。人が人を愛した結果する行為を汚らしいとして見るのは禁止。それが日本の性教育の実態です。

これから述べる言葉は、人から聞いた話で正確に語れないかも知れませんが、何を言いたいのかその点を把握してください。

『西ドイツの大統領がポルノグラフィを解禁するにあたっての演説の内容です。』「私自身はポルノグラフィは嫌いです。私は見ていると気持ちが悪くなります。しかしポルノグラフィを解禁した各国のデータから見ると、解禁する前より解禁した後は性犯罪が減っているという事実。そのような見地からしてみても、我が良識あるドイツ国民はポルノグラフィを解禁したからといって、変質者や性犯罪が増えるとは思えません。よってここにポルノグラフィを解禁します。」と以上のような演説をされたとか、立派な大統領だと思えます。即ち大統領はドイツ国民を信頼しているから解禁をする、という事が大事な所です。

日本国の偉い人々は日本国民を信頼できないから、今もってポルノグラフィを解禁していないのです。即ち国民は子ども扱いされているのです。マッカーサー元帥は日本人は十二歳程度である、と言われたとか。日本国政府は今もって日本国民を十二歳程度にしか見ていないという事です。大変侮辱しているではありませんか。』

貴方はこの話を聞いてどのように感じたでしょうか。

今や色々な性教育の本、すなわち技術書なる書物が町の本屋さんに氾濫する時代となりました。今日においても、私が体験した十年前と内容において変わりばえがありません。あの時代でさえ日本の性教育は先進国より二十年遅れていると言われたのですから、今や三十年も遅れているのかも知れません。

最後の道標



人生の道標という事で書き始めたわけですが、次々と専門的な道標にぶつかったり、又、その専門的な道標について書き始めそうになったりしましたが、極力人生の本質に触れる問題を選んで道標を立てて来たつもりです。本というのは多かれ少なかれ道標の代わりをしています。この道標が色あせてくる頃には、この標識を元に更に新しい道標にチャレンジしてみたいと思います。

かなりの道程を歩ってきたように感じます。たくさんさんの標識を立てたような気がします。この本を読む人が人生という道に迷わないよう、また迷いながらも、目的地に行けることを願います。

皆さんもこの本に出てくる道標を見て、たくさん思い当たる標識が出てきたと思いますが、思い当たるだけでなく、理解するだけでなく、思い当たったら、理解できたら、まず一步を踏み出してください。政治が悪い、社会が悪い、何々が悪いといって一步も前に踏み出ない自分が一番悪いのです。

ただ単に一步前に出れば良いというのでもありません。何年か前の流行語に「赤信号、皆で渡れば恐くない」というのがあり、大ヒットした言葉がありました。あの意味をよく考えてみてください。赤信号を皆で渡っているのです。赤信号は止まれの信号です。黄色なら注意しろですが、赤は危険を意味しているので。皆で赤信号を理解したうえで渡っている所に車が飛び込んできたらどうなるのでしょうか。確実にかなりの死傷者が出るでしょう。車が悪いのでしょうか、それとも危険を承知で渡っている人々が悪いのでしょうか？危険なところを皆で進めば被害は大きくなるばかり、標識を間違って解釈すれば、人類は亡びるでしょ

う。もしも赤信号と分かるならそれは止まるべきで、また止まらなくては人間としての生命を放棄する事以外の何ものでもないということを認識してください。

そして又、以上この本に述べてきた道標のほかに、色々な道標を選択するのに当たって、一言例を挙げて述べて置きましょう。

善と悪、あるいは、信号機のように赤と青（進め、停まれ）の様にはっきりと区別できない存在があります。

我が家では小鳥、犬、リスなどのペットを飼っております。何年か前になりますが、三人の息子と娘達をとりかど鳥籠の前に集めてこんな話をしたことがありました。「お前達はこの鳥籠の鳥達を見て、空を自由に飛ぶ鳥と籠のなかで人間に餌をもらって生きて行く鳥と、お前達が鳥になるならどちらを選ぶ？」三人の子ども達はしばらく考え込んでおりました。どちらの道を選択しても私は、間違っていないと思います。

すべての人がサラリーマンになってしまったら世の中回っては行きません。食べ物を生産する人、魚介類を採る人、建物を作る人、色々な分野にわたって色々な人々が仕事をしているお蔭で人間社会が運営されているからです。

この本の最初に書きましたように、「人が一人から二人になり家庭が生まれ、村や町や市や都市となり国家をなす時、自分の存在あるいは、一人ひとりの人間の存在が希薄になって行き、いつのまにやら自分の思っていた道を歩まず、いつ、誰がきめたか分からない様な迷路を歩み始めているのです。」と述べましたが、

いいかげんな情報に惑わされる事なく、各人自分自身に適した道の選択が非常に大切な事柄になって来るとを、ご理解いただけると幸いです。

この本をお読みになって著者は何を言いたくて書いているのか分からないという方もおられるでしょう。その方にはもう一度、初めの「人生の道標」の最後を読み直して下さい。私は道標そのものを立てて来たのであって、貴方の案内人にはなれないのです。もしも案内人がいるとしたら、それはこの本をお読みになっている貴方自身かもしれません。

全般を通して私の述べたい事をまとめると「人間とは、物の見方をどのように見るか、道具をどのように扱うか、二つを極める事」ただ、それだけの事です。

総索引として簡単にまとめておきます。

一、「人生の道標」(始めに)……………私がこの本を書くまでの簡単な動機と道標について。

二、「物の見方」……………色々な道標を書くのに当たって、例えば地図の見方が違えば目的の標識が見つからないという事を理解していただくテーマです。

三、「生まれてくる」……………生まれて来て、今、生きているという事を認識してください。

「文化と文明」

四、「人間とは何か」……………一番難しく、大切な道標です。

「愛と恋の違いについて」

五、「学問とは何か」……………物の見方をフルに活かしてください。

「テストって何故するの？」……………道具の使い方です。

「成績表とは何か、通知表とは」……………同じく道具の使い方です。

「今日社会問題になっている教育戦争とは」……………物の見方です。

六、「生涯教育について」……………物の見方です。

七、「ちょっとひと休み」……………休憩です。

八、「日本から天才は生まれない」……………物の見方です。

九、「理想と現実のくいちがい」……………物の見方です。

十、「お金と言葉と人種差別」……………道具の使い方と物の見方です。

「お金とは何なのか、何であったのか、そして今は何なのか」

「言葉とは」

「人種差別（人間差別）」

十一、「性について考えてみよう」……………物の見方です。

十二、「最後の道標」……………すべてを振り返ってみて。

終わりにあたって一言

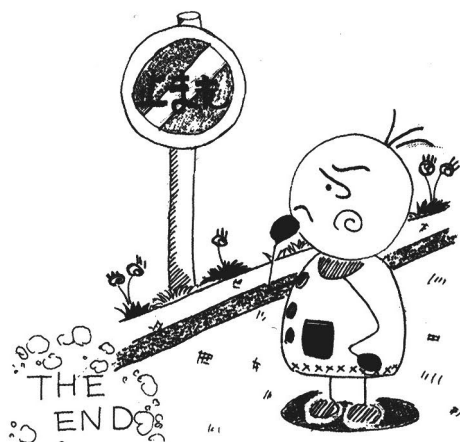
私の人生で初めてチャレンジした本の製作でしたが、いたるところに不備な点もございましたが、最後までこの本におつき合い下さいまして、大変ありがとうございました。

お読みいただいた貴方へ贈る最後の言葉として、「人生の出会いを大切に」この言葉を贈ります。人間はすべての始まりが「出会い」です。親との出会い、出産から始まったこの人生が、友との出会い、師との出会い、芸術との出会い、音楽との出会い………出会い。

私が現在の道程を歩いてきたのも、物心ついたときから我が家に掛かっていた、今ではどなたが描いたか分からない、一枚の油絵（木のキャンバスF6）に描かれていた静物画との出会いから始まっていることに最近気がついたのです。その絵との出会いがなければ、絵画にもさほど関心もなく、今の私の存在も大きく変わっていたかも知れません。

皆さん一人ひとりが出会いを大切に日々暮して行けば、きっとどこかが変わって行くでしょう。

昭和六十三年十二月十日



参 考 文 献

炎 芸 術	阿 部 出 版
孤 峰	江戸千家茶道会
学習大百科事典	小 学 館
現代用語の基礎知識	自 由 国 民 社
人物日本の歴史	集 英 社
密 教 図 典	筑 摩 書 房

著 著 略 歴

昭和25年 3月30日前橋に生まれる

昭和47年和光大学人文学部芸術学部卒業

昭和47年オノヤ住宅デザイン室勤務、建築デザイナーとして職に就く

歯科医院、喫茶店、レストラン、美容室、その他設計施行

昭和50年オイルショックにより建築界を断念する

同年野中興業株式会社に入社

昭和54年陶芸を志す

昭和56年野中興業を退社

昭和57年有限会社響を設立

不動産部門、食堂部門（お好み焼き響陶）、塾経営（美術教室
アトリエ・バラ）、美術工芸品の販売と以上の4つの部門でス
タートをし今日に至る

昭和57年より前橋市民展に出品61年に無監査推挙

同年より群馬県展に出品62年まで連続入選

昭和62年陶光会全国陶芸展に会友推挙

昭和63年日本工芸美術家連盟主催第3回花のうつわ展入選

出 会 い ― 人 生 の 道 標 ―

定 価 1,000 円

昭和63年12月15日発行

著 者 江 原 重 雄

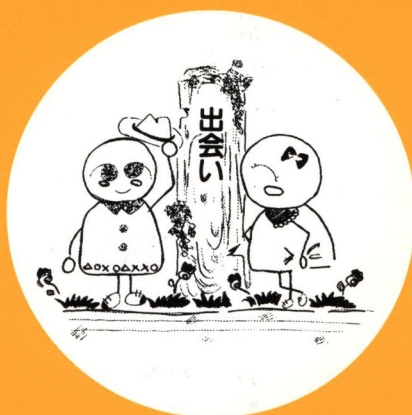
発 行 有限会社 響

発売・印刷 上 毛 新 聞 社 出 版 局

群馬県前橋市古市町 1-50-21

〒 371 電話 (0272) 51-4341

© 1988 S. EBARA



定価 1,000円